坂田遺跡発掘調査報告書

―県道三田三葛線道路改良工事に伴う発掘調査―

2011 年 3 月

財団法人　和歌山県文化財センター

坂田遺跡発掘調査報告書　―県道三田三葛線道路改良工事に伴う発掘調査―

２０１１年３月　財団法人　和歌山県文化財センター

調査地周辺遠景（北上空から）

A 区 琴柱形石製品（実寸大）

序

坂田遺跡は竈山神社の北側に隣接する新発見の遺跡です。

本遺跡の北には弥生時代から古墳時代の集落遺跡である神前遺跡や、東側には弥生土器の散布地である和田遺跡の存在が知られています。また、周辺には独立丘陵上に築かれた和田古墳群、三田古墳群、坂田地蔵山古墳といったような多くの古墳も点在しています。

中でも、竈山神社境内の北側に所在する竈山神社古墳は、神武東征の折、この地で戦死したと伝えられる神武天皇の兄彦五瀬命墓としてよく知られています。

本調査は、この竈山古墓の北側裾をかすめる様な状況下で実施しました。発見した遺構や遺物は古墳時代と中世のものが中心でした。なかでも、県下では僅かしか出土例のない琴柱形石製品が出土したことは、特筆すべきことと言えます。

ここに、発掘調査の成果をまとめ、報告書を刊行いたします。本書が郷土の歴史を知る一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書作成にあたりご指導、ご協力をいただきました関係各位の皆様方に深く感謝申し上げるとともに、今後とも当文化財センターへの一層のご理解とご支援を賜りますようお願いいたします。

平成２３年３月２５日

財団法人　和歌山県文化財センター

理 事 長　　鈴　木　嘉　吉

例　言

1．本書は県道三田三葛線改良工事に伴う坂田遺跡発掘調査報告書である。

2．発掘調査および出土遺物整理作業は和歌山県海草振興局工務課道路グループより委託を受け、和歌山県教育委員会指導のもとに実施した。

現地調査は平成 21 年 11 月 12 日から平成 22 年３月 12 日までの期間で、1,947㎡の調査を実施した。

出土遺物整理作業は平成 22 年 11 月１日から平成 23 年２月 18 日までの期間で実施した。

3．調査組織は下記のとおりである。

	【発掘調査】	【整理作業】
事 務 局 長	田中　洋次	田中　洋次
管 理 課 長	冨加見泰彦	冨加見泰彦
埋蔵文化財課長	村田　　弘	村田　　弘
（調査・整理担当）		
埋蔵文化財課主任	佐伯　和也	佐伯　和也
埋蔵文化財課主任	尾藤　徳行（財団法人 京都市埋蔵文化財研究所から派遣 平成 20 年 10 月１日～平成 21 年 12 月 31 日）	
非常勤専門調査員	寺西　朗平	

4．調査および本書で使用した座標値は世界測地系第Ⅵ系で、北は座標北である。使用した標高は東京湾潮位（Ｔ．Ｐ．＋）である。

調査地の堆積土層の土色は農林水産省農林水産技術会議事務局監修 2005 年度版「新版標準土色帖」に準じた。

5．航空写真撮影および基準点測量は写測エンジニアリング株式会社に委託した。

6．遺構写真は尾藤、寺西、佐伯が、遺物写真は佐伯が撮影した。

7．遺物図面の縮尺は土器類１／４、石製品１／２、遺物写真については任意の大きさで掲載した。

8．調査で使用した調査コードは０９－０１・４３５（2009 年－和歌山市・遺跡番号）である。記録資料はこのコードを用いて管理している。

9．発掘調査および遺物整理事業で作成した実測図・写真・台帳等の記録資料は財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が保管している。

10．本書の編集、執筆は佐伯が担当した。

11．発掘調査及び遺物整理業務に際し、関係機関の皆様方からご協力、ご教示を得た。ここに深く感謝を表します。

本　文　目　次

序・例言

第１章　調査の経緯と経過 …… 1

第１節　調査の経緯 …… 1

第２節　調査の経過 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境 …… 3

第３章　調査 …… 4

第１節　調査の方法 …… 4

第２節　調査の概要と基本層序 …… 4

第３節　遺構と遺物 …… 6

第４章　まとめ …… 25

挿　図　目　次

第１図 遺跡所在地および周辺の遺跡 …… 2

第２図 調査位置図 …… 3

第３図 調査区基本層序 …… 5

第４図 遺構平面図 …… ７・８

第５図 Ａ区遺構 010 土器出土状況・土層実測図 …… 9

第６図 Ａ区遺構土層実測図 …… 11

第７図 Ａ・Ｂ区遺構土層実測図 …… 12

第８図 掘立柱建物１・２実測図 …… 14

第９図 掘立柱建物３・４・５実測図 …… 15

第 10 図 遺構 250 実測図 …… 16

第 11 図 遺構 803 実測図 …… 17

第 12 図 Ａ区出土遺物実測図（１） …… 18

第 13 図 Ａ区出土遺物実測図（２） …… 20

第 14 図 Ａ・Ｂ区出土遺物実測図（３） …… 21

第 15 図 Ａ区出土遺物実測図（４） …… 22

第 16 図 Ａ・Ｂ区出土遺物実測図（５） …… 23

第 17 図 琴柱形石製品実測図 …… 24

図　版　目　次

巻頭図版 １．調査地遠景（北上空から）

巻頭図版 ２．琴柱形石製品

図版１ 上．調査地近景（東上空から）

下．調査地近景（西上空から）

図版２ 上．調査区全景（東から）

中．Ａ区北側全景（西から）

下．Ａ区東側全景（東から）

図版３ 左上．Ａ区遺構 010（溝）完掘状況（東から）

右上．Ａ区遺構 010（溝）土器出土状況（西から）

左中．Ａ区北側遺構 843（土坑）土層堆積状況（東から）

左下．Ａ区北側遺構 843（土坑）完掘状況（東から）

右中．Ａ区遺構 003（土坑）完掘状況（北から）

右下．Ａ区遺構 003（土坑）内琴柱形石製品出土状況

図版４ 左上．Ａ区掘立柱建物１（東から）

右上．Ａ区掘立柱建物２（南西から）

左中．Ａ区掘立柱建物３（南西から）

左下．Ａ区掘立柱建物５（東から）

右中．掘立柱建物１ 柱穴 589 断割（西から）

右下．掘立柱建物１ 柱穴 304 断割（西から）

右下．掘立柱建物１ 柱穴 294 断割（南から）

図版５ 左上．Ａ区遺構 250（井戸）検出状況（南から）

左中．Ａ区遺構 250（井戸）断割り状況（南から）

右上．Ａ区遺構 803（井戸）検出状況（北から）

右中．Ａ区遺構 803（井戸）断割り状況（南西から）

左下．Ｂ区遺構 1001（溝状遺構）・1013（溝状遺構）完掘状況（北から）

右下．Ｂ区遺構 1013（溝状遺構）・1015（溝状遺構）完掘状況（北東から）

図版６ 遺物掲載番号１～４、６・７・10・14・15、18 ～ 20

図版７ 遺物掲載番号 21 ～ 26、29 ～ 37、40

図版８ 遺物掲載番号 38・39、41 ～ 44、49、52 ～ 56、59・61・62・64・65

図版９ 遺物掲載番号 67・68・70・71・74・75・77・78・81・82、84 ～ 86、88・90・96

図版10 遺物掲載番号 89・91・97・99、100 ～ 102、107、110 ～ 114

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

坂田遺跡の発掘調査の契機は、和歌山県が県道三田三葛線改良工事を計画し、その工事予定地の一部が、埋蔵文化財包蔵地である竈山神社古墳に及んだため、和歌山県教育委員会から和歌山県に確認調査を要する旨の通知がなされた。

確認調査は、生涯学習局文化遺産課が平成 21 年１月に、道路建設予定地内の竈山神社古墳の隣接する北側に試掘トレンチを設定し、確認した結果、周知の埋蔵文化財包蔵地以外に遺跡が展開することが予想されたため、先のトレンチの更に北側にもトレンチを設定して遺構を確認している。

また、同年２月にも西側の包蔵地展開範囲確認のため試掘調査を実施し、道路建設予定地内での調査の必要範囲を決定した。

故に、今回の本発掘調査に至った坂田遺跡は新発見の遺跡として、平成 21 年６月８日付けで和歌山県埋蔵文化財包蔵地として新規認定された。

第２節　調査の経過

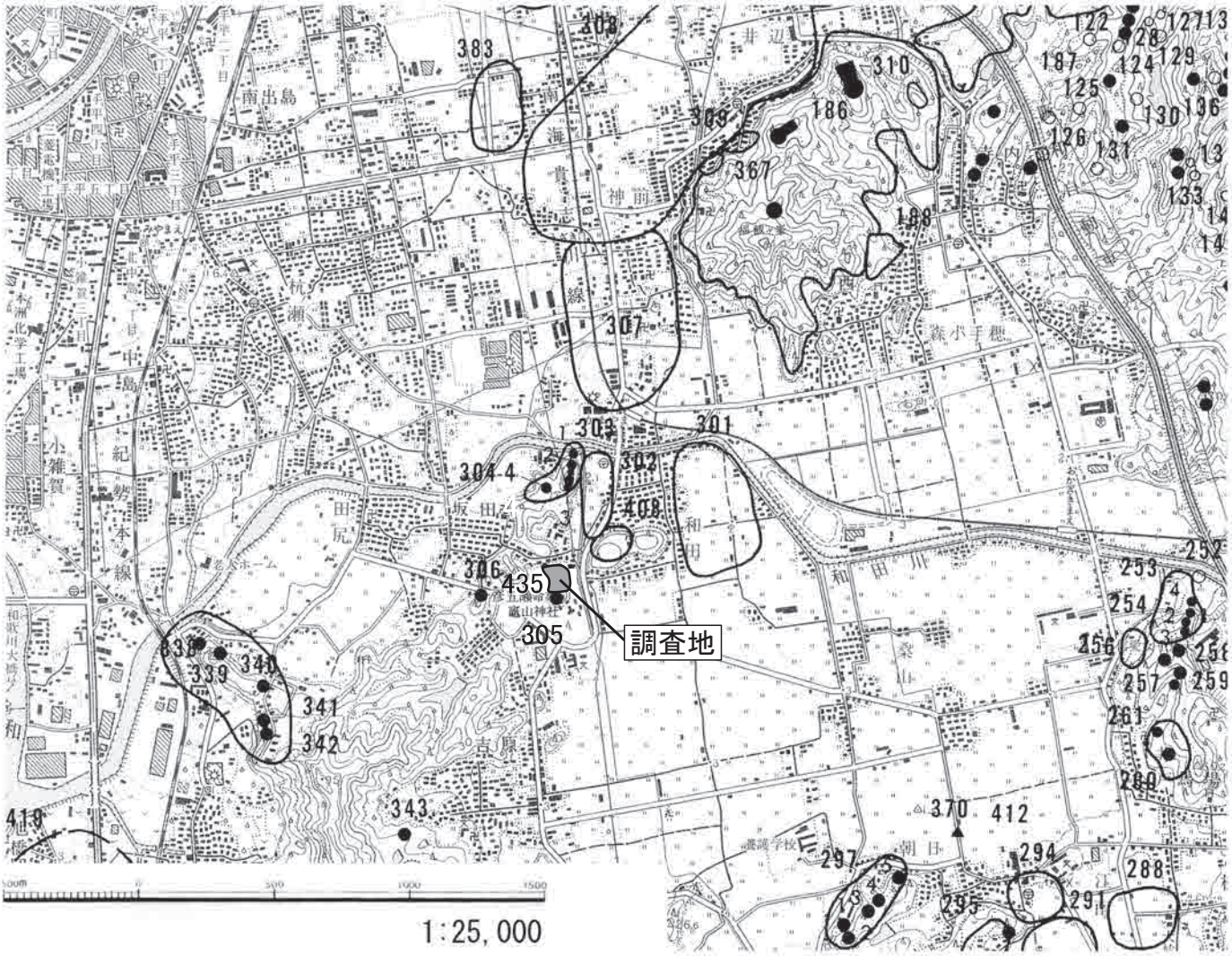
発掘調査は平成 21 年 11 月半ばから平成 22 年３月半ばにかけて工事請負方式で実施した。ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影と調査地内の４級基準点打設は専門業者に委託した。また、平面図、土層図等の実測作業は手測りで行った。

調査は対象地一面に雑草が夥しく茂り、まず、これの刈取り作業から行わなければならなかった。刈取り終了後、調査対象地の範囲確定のための測量を行い、調査地外の東側と西側を排土置場とし、機械掘削作業にかかった。機械掘削終了後、人力で包含層を掘削し、この土も機械掘削同様に排土置場にベルトコンベアーで流した。次に、遺構検出作業は東側から西側にかけて行った。調査地は東側が微高地で若干西側より高くなっており、遺構密度が高く、遺構配置図の作成、個別遺構等の実測作業および写真撮影に手惑った。

調査途中で、当初から調査対象範囲になかった箇所を対象地に追加（本文中のＡ区北側）し、委託者（和歌山県）と平成 22 年２月 23 日付で変更契約を交わした。

調査も最終段階の遺構の断割り作業時期に降雨日が続き、実測作業や写真撮影に難をきたしたが、重機による埋戻し作業も無事終了し、平成 22 年３月 12 日に調査事務所の備品撤収、事務所解体を終了した。

また、調査と並行して応急整理作業として、出土した土器の洗浄作業を行い、遺物登録台帳作成用の出土遺物写真撮影を登録番号毎にデジタルカメラで撮影した。



第１図　遺跡所在地及び周辺の遺跡

遺跡番号	遺跡名	いせきめい	所在地	種別	時代	立地	遺跡概況
186	井辺前山古墳群	いんべまえやまこふんぐん	井辺・岡崎・寺内・神前・西・森小手穂	古墳群	古墳	山腹	前方後円墳15基、円墳60基
297	赤津古墳群	あかつこふんぐん	朝日	古墳群	古墳	丘陵	5基
301	和田遺跡	わだいせき	和田	散布地	弥生	沖積地	弥生土器
302	和田岩坪遺跡	わだいわつぼいせき	和田	散布地	弥生～古墳	沖積地	弥生土器、土錘、須恵器、土師器
303	和田古墳群	わだこふんぐん	和田	古墳群	古墳	丘陵	4基
304-4	和田4号墳	わだよんごうふん	和田	古墳	古墳	丘陵	前方後円墳？
305	竈山神社古墳	かまやまじんじゃこふん	和田	古墳	古墳	丘陵	円墳
306	坂田地蔵山古墳	さかたじぞうやまこふん	坂田	古墳	古墳	丘陵	円墳？、横穴式石室、直刀、須恵器
307	神前遺跡	こうざきいせき	神前	散布地	弥生	沖積地	弥生土器、石包丁、紡錘車、石斧、土師器
310	森小手穂埴輪窯跡	もりおてぼはにわかまあと	森小手穂	窯跡	古墳	山麓	埴輪（円筒、形象）
338	アンドの鼻古墳	あんどのはなこふん	三葛	古墳	古墳	丘陵	組合式石棺、土師器（壺）
343	吉原古墳群	よしはらこふんぐん	吉原	古墳	古墳	丘陵	前方後円墳？
367	井辺Ⅲ遺跡	いんべさんいせき	井辺	散布地	縄文	丘陵麓	
399～342	三田古墳群	さんたこふんぐん	三葛	古墳群	古墳	丘陵	4基
408	和田Ⅱ遺跡	わだにいせき	和田	集落？	弥生	丘陵	溝状構造、弥生土器

編集・発行　和歌山県教育委員会　平成 19 年 3 月 31 日発行
和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図から転載

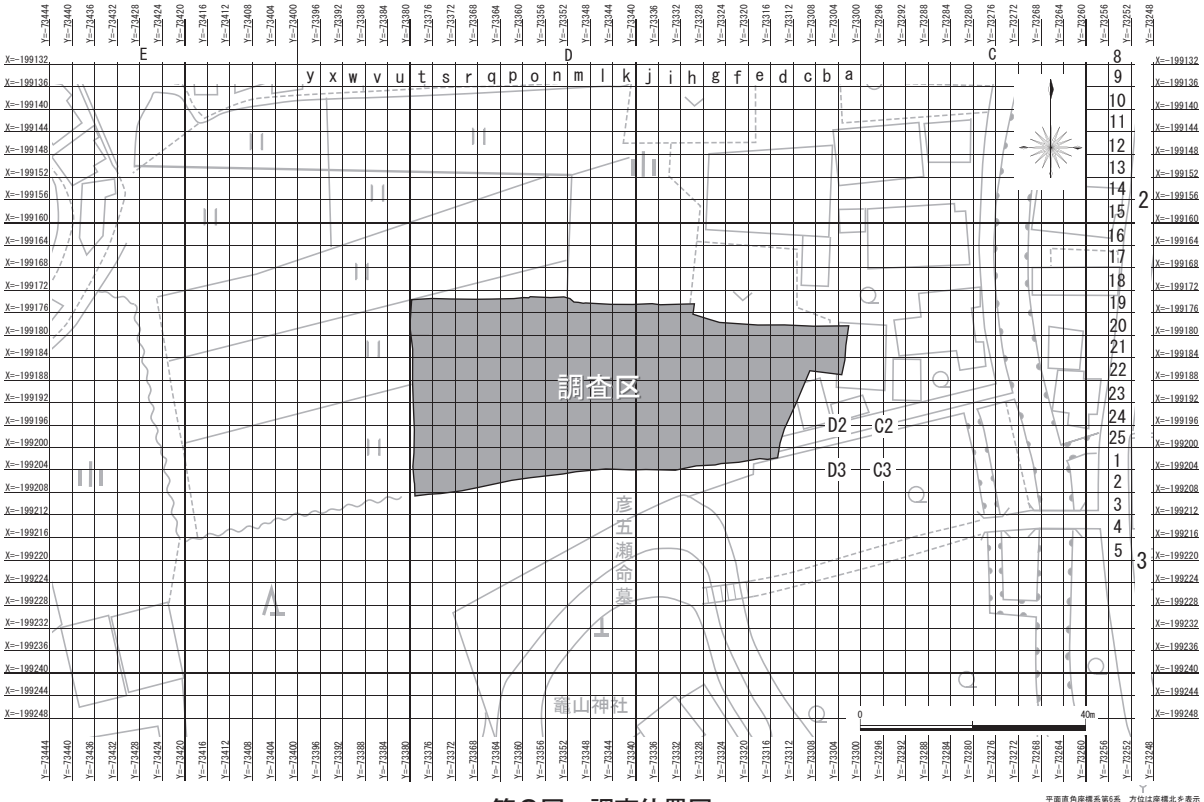
第２章　遺跡の位置と環境（第１図）

坂田遺跡は和歌山平野の南部にあり、和田川下流域の左岸の低湿地から南に位置する。

調査地周辺には、北側に井辺山古墳群、和田古墳群、西側には坂田地蔵山古墳、三田古墳群などが所在する丘陵がある。集落遺跡としては調査地の東側を北流する名草川の東、あるいは北側を西流する和田川の北側、南側に弥生時代を中心とする神前遺跡、和田岩坪遺跡、和田Ⅱ遺跡、和田遺跡などが所在する。これらの遺跡の所在するところは、律令時代の条里型地割が顕著に遺っていることでもよく知られている。

調査地南側の竈山神社に隣接して、宮内庁御陵である竈山神社古墳が「彦五瀬命墓」として管理されている。彦五瀬命の逸話は「日本書紀」に詳しく記載され、命は神武天皇の兄であり、神武東征の折、流れ矢に当たり負傷し、この竈山の地で没したことが記されている。これが「延喜式」の諸陵式にみえる竈山墓で、紀伊国唯一の陵墓である。

また、竈山神社は永徳元年紀伊の国造家によって鵜飼新五郎が神主職に任じられ、中世を通じて鵜飼家が世襲していたと考えられる。天正 13 年３月豊臣秀吉の紀州攻めで社殿をはじめ神宝や古記録などが焼失し、和太荘内の社領八町八反も没収されたと鵜飼家文書に伝わる。慶長５年に浅野幸長が小祠を再建し、寛文９年には徳川頼宣が社殿を再興したと伝わる。これと時期を同じくして不明確になっていた竈山墓の区域を設定し、殺生を禁止した。その後も荒廃したが、明治 14 年墓域を現在地に画定し、陵墓と社殿が区別され現在に至っている。



第２図　調査位置図

第３章　調　査

第１節　調査の方法（第２図）

調査地の地区割は国土座標第Ⅵ系（世界測地系）を使用し、坂田遺跡を網羅する範囲の北東に基点を設けた。坂田遺跡の基点は（Ｘ＝－199.00km.　Ｙ＝－73.00km）とした。次にこの基点から西方向と南方向にそれぞれ一辺 100 ｍを１単位とした正方形区画を大区画とした。これの呼称は東西方向をＡ～Ｙ、南北方向を１～ 25 とした。次に、大区画内を４ｍ毎に割り、同様に東西方向をａ～ｙ､南北方向を１～ 25 とし､小区画を設定した。調査時の包含層や遺構の遺物取上げは、この小区画の４ｍメッシュの地点に地区杭を打設し、取上げた。

調査の記録作成は図面作成と写真撮影とに拠った。記録図面の作成は、遺構配置図はＳ＝1/100 で、遺構平面図はＳ＝ 1/20、個別遺構平面図・断面図はＳ＝ 1/10 とＳ＝ 1/20、調査地壁面土層図はＳ＝ 1/20 で手測り実測を行った。写真撮影は４×５判モノクロームフィルム・カラーリバーサルフィルム、６×７判モノクロームフィルム・カラーリバーサルフィルム、35㎜カラーリバーサルフィルム、デジタルカメラを使用した。なお、完掘状況はラジコンヘリコプターで上空写真撮影を行った。遺物はコンテナ（28 リットルサイズ）で 32 箱出土した。

第２節　調査区の概要と基本層序（第３図）

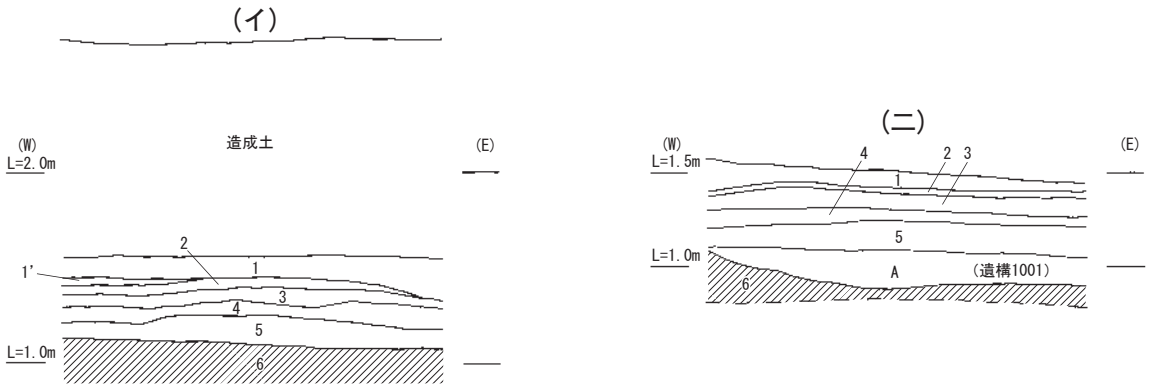
調査地の現況は荒蕪地および宅地跡で、地形的に東から西に旧水田の段差が付いていた。調査の便宜上、東側の高い地区をＡ区、西側の低い地区をＢ区と呼称した。調査途中で同道路敷き内のＡ地区の北側に当たる箇所を追加調査した。この地区の呼称をＡ区北側とした。現況は民家の畑地で、周囲をコンクリート基礎で囲い、その上にブロック積みをし、此処でも多量の片岩礫の混ざった造成土で 1.1 ～ 1.2 ｍの嵩上げをしていた。また、調査区周囲はコンクリート基礎により約 2.0m ～ 2.8m 幅で撹乱されていた。

調査前の現地盤の標高はＡ地区では約 2.5 ｍ～ 1.7 ｍ、Ｂ地区では約 1.7 ｍ～ 1.5 ｍ、Ａ区北側では約 2.7 ｍ～ 2.6 ｍを測る。調査面積は 1,947㎡である。

【Ａ区】

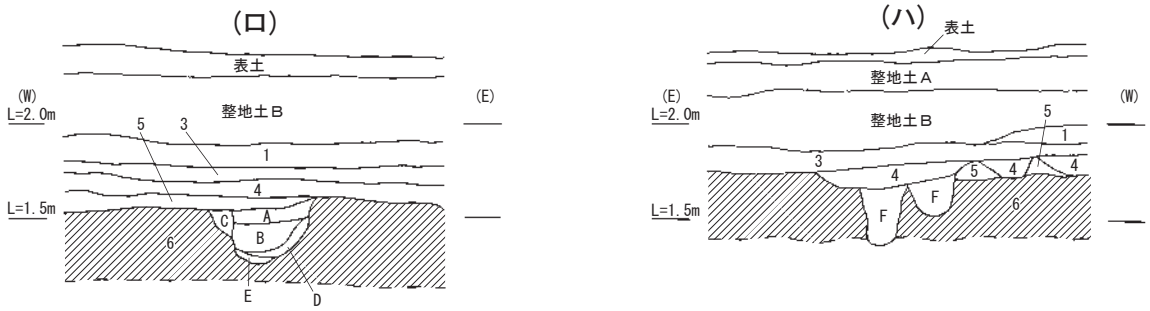
基本的層序は第１層（耕作土）、第２層（床土）、第３層、第４層は土色が若干ちがうだけで、基本的には同じで、双方ともに片岩礫の小片が混じるところから中世の整地土と考えられる。第５層は中世包含層で 10YR4/4（褐）と 10YR6.5/1（褐灰）のシルトの混層である。第６層は地山と考えられる層で黄橙色のシルト質である。第１層上には約 40 ～ 60㎝の厚みで、近現在の嵩上げと考えられ、多量の片岩礫（２～ 50㎝大）の入った整地土が認められ、その上層は表土となっていた。なお、床土は非常に薄く、場所によっては認められない。

検出した遺構には古墳時代の溝、土坑、井戸状遺構、掘立柱建物、中世の土坑、溝、柱穴、素



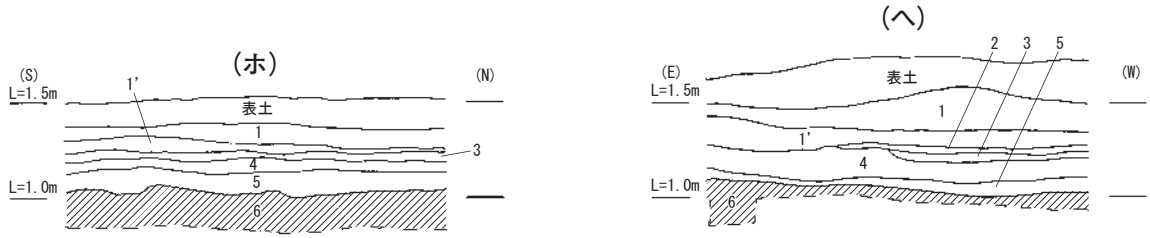
（イ）地点土層名
1．耕作土
1'．耕作土
2．床土
3．10YR6/1(褐灰)微砂シルト
φ0.2 ～ 0.5cm 大のマンガン粒 2%入る(中世包含層)
4．2.5Y7/1(灰白色)シルトに 7.5YR7/8(黄橙色)シルトが混じる
φ0.2 ～ 0.5cm 大のマンガン粒 2%入る（中世包含層）
5．5Y7/1(灰白色)シルト　2.5Y6/6(明黄褐色)シルトを淡い斑状に少量含み、粗砂も少量含む
6．7.5YR5/3(にぶい褐色)シルトに 10YR7/1(灰白色)シルトが混じる
（地山）

（ニ）
1．耕作土　2.5Y3/1(黒褐色)シルト・細砂
2．床土　5YR6/3(黄橙色)シルト
3．N7/0(灰白色)シルト　粗砂を多量に含みφ2 ～ 10mm の礫を少量含む
4．5Y6/3(オリーブ黄色)シルト　φ2 ～ 5mm の礫をわずかに含む
5．5Y7/1(灰白色)シルト　2.5Y6/6(明黄褐色)シルトを淡い斑状に少量含み、粗砂も少量含む
A．2.5Y7/1(灰白色)シルト　遺構 1001 の埋土、2.5Y6/6(明黄褐色)シルトが縦方向の帯状に少量入る、マンガン粒をわずかに含む
6．2.5Y7/4(浅黄色)シルト(地山)



（ロ）・（ハ）地点土層名
1．耕作土　7.5YR5/4
3．10YR6/4(にぶい黄橙色)微砂混じりのシルトにφ0.5 ～ 2.0cm の礫が 3%入る
4．10YR6/3(にぶい黄橙色)微砂混じりのシルトにφ0.5 ～ 2.0cm の礫が 3%入る
5．10YR4/4(褐色)シルトと 10YR5.5/1(褐灰色)シルトの混層　φ0.5cm 内外のマンガン粒少量入る
6．10YR8/7(黄橙色)シルトにφ0.2 ～ 0.5cm のマンガン粒 10%入る(地山)

遺構埋土
A．10YR6/2(灰黄褐色)砂質シルトに 7.5YR4/4(褐色)のマンガン粒が 3%入る
B．10YR6/2(灰黄褐色)砂質シルト　A 層に比べてマンガン粒が少ない(1 ～ 2%)
C．10YR6/2(灰黄褐色)砂質シルト　A 層に比べてやや褐色が強い
D．10YR7/1(灰白色)砂質シルト
E．10YR6.5/1(褐色)砂質シルト
F．7.5YR6/1(褐灰色)シルトと 10YR6/1(明黄褐色)シルトの混層　φ0.2 ～ 0.3cm の片岩礫 2%入る



（ホ）・（へ）
1．耕作土　2.5Y3/1(黒褐色)シルトに細砂を含み、10YR7/8(黄橙色)シルトが混じる
φ0.1 ～ 0.2cm 大のマンガン粒 1%入る
2．床土　5YR6/3(黄橙色)シルト
3．10YR6.5/1(褐灰色)シルト
4．5B7/1(明青灰色)シルトに 10YR5/8(黄褐色)微砂混りシルトが入る
5．2.5Y7/4(浅黄色)シルト
6．5B7/1(明青灰色)シルトにφ0.5 ～ 1.5cm のマンガン粒 7.5Y4/3(褐色)10%入る

0　2m

第３図　調査区基本層序　（S ＝ 1/40）

掘り井戸などがある。遺構は地山直上で検出した。古墳時代の遺物は中世の整地層とした第３層・第４層から土器の大部分が出土している。

【Ａ区北側】

基本的層序は上層から第１層（耕作土）、第２層（床土）、第３層・第４層は水平堆積を呈し、中世の水田層と考えられる。第５層も出土遺物や水平堆積をすることから中世水田層の可能性が高い。遺構検出面は南側のＡ区に比べ約 0.4 ｍ程度低くなっていた。第４層から砂岩系材質の勾玉が出土した。

【Ｂ区】

現地盤の標高はＡ区と比高差があり、約 1.0m 低くなっていた。また、堆積の様相はＡ区やＡ区北側と全く異なり、湿地状の堆積層を形成する。基本層序は第１層（耕作土）、第２層（床土）、第３層～第５層は粘性度の強いシルトで場所によっては色調が異なる。第６層は地山と考えられる強粘性のシルト層である。遺構は地山上で検出した。

第３節　遺構と遺物

【Ａ区】

検出した遺構には古墳時代の溝、土坑、井戸状遺構、掘立柱建物、中世の土坑、溝、柱穴、素掘り井戸などがある。遺構は地山上で検出した。主だった遺構について次に記述する。

遺構 010（第４・５図･12 図､図版３） 調査区東端で検出した溝状遺構である。南へ湾曲して、遺構 448（中世整地土範囲）で削平され遺構 445（溝状遺構）の東側で検出した。底面の高さから東流していたと考えられる。検出長は途切れた箇所を含めると約 20m、幅は 1.0 ～ 1.5m を測る。残存の深さは 0.15 ～ 0.20m を測る。埋土は灰色系シルトで､均等にレンズ状の堆積を呈する。この溝からは第 12 図の遺物が出土している。（１・２）は弥生後期後半から庄内の時期と考えられる広口壺で、（１）は口縁端部外面と肩部に二段の竹管文が巡る。（３～ 10･13）は甕で、（３・４）は口縁端部にキザミを施し、口縁中程に接合痕が見られる。弥生後期後半～庄内に時期と考えられる。（５）は口縁部が直線的に屈曲する。Ｖ様式型甕である。（11・12・14）は鉢で、（12）は台付き鉢か。（15・16）は有孔鉢で、（16）は孔が大きく直径２㎝を測る。（18 ～ 20）は高坏の脚部で、（18･19）は内面をケズリ、外面は横方向のナデを施す。庄内～布留の時期である。（20）は庄内期前半の椀型高坏である。（21 ～ 25）は瀬戸内型土錘で両端に直径５～７㎜の孔を穿つ。

Ａ区中程北側で検出し得たほぼ円形を呈する、規模 0.5 ｍ× 0.45 ｍの小土坑**遺構（464）**からは弥生後期後半から庄内期にかけての壷（27）、鉢（28）や口縁部キザミ後ナデを施す甕（26）が出土している。

遺構 460・遺構 540（第４図） 遺構調査区中央付近の南壁にかかって検出した。双方ともに試掘時（１トレンチ・２トレンチ）に確認している。双方の溝は中世の整地土（遺構 448）や

第４図　遺構平面図　（S＝1/200）

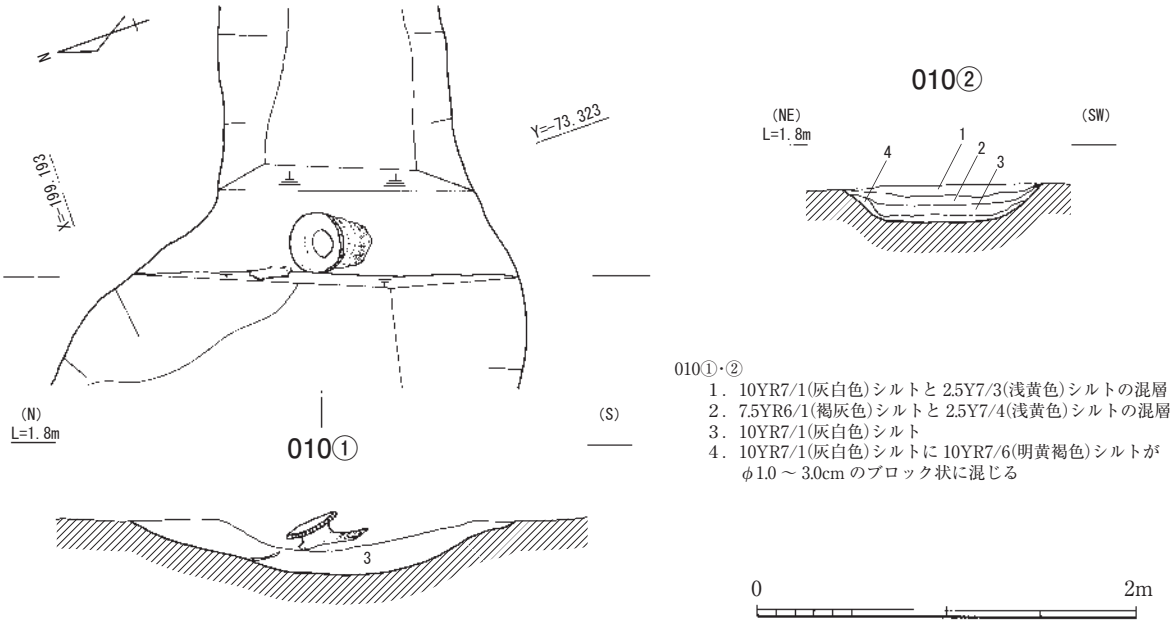
溝状遺構（445）で途切れはするが、その埋土の状況や規模、位置関係から同一のものと考えられ、幅は約 1.30 ～ 1.80m を測り、残存の深さは約 0.3m を測る。ただ、調査区南壁際で双方が終息するように浅くなる。埋土は基本的に３層に分層でき、上層は褐色系、中層は灰黄色系、下層は黄褐色系を呈するシルトで、細かな片岩礫を全体に含む。ここからの出土遺物は土師器細片が十数点出土している。

遺構 704　調査区西側の南端で検出した。南側は調査区外に延び、その全容は不明である。検出し得た形状から方形の土坑と考えられる。規模は東西約 2.0m、南北約 1.40m 以上を測る。残存の深さは約 1.60m を測る。埋土は基本的に３層に分層され、上層から褐色系シルト、中層は青灰色シルト、下層は暗青灰色シルトである。底には４～ 10cmの厚みで均質な細砂が堆積する。底の標高は－0.40 を測り、湧水があることから、この遺構も井戸と考えられる。ここからの出土遺物の殆どは上・中層からのもので、（29 ～ 32）はⅡの２段階の時期と考えられる須恵器の杯蓋や身、提瓶の口縁部（32）である。（33）は土師器椀である。内面は篦ケズリを施す。また**遺構 332** のピット状遺構からも同時期の須恵器杯身（37）が出土している。

遺構 560　（第６図）は 2.6 m × 2.3 m規模の土坑状遺構である。深さは約 0.2 mを測る。埋土はレンズ状に堆積する。ここからは（34）の丸底と考えられる小型の甕が出土している。内外面の摩耗が激しい。

遺構 230　調査区東端で検出した南北方向に延びる溝である。ここからは（35）の広口壺口縁部と（36）鉢が出土している。時期的には庄内期～布留期と考えられる。

遺構 660　（第６図）Ａ区の北西で検出した土坑状遺構である。形状はおおむね長方形で、規



第５図　Ａ区遺構 010　土器出土状況・土層実測図　（S ＝ 1/40）

模は長軸 3.36 m、短軸 1.16 mを測る。深さは 0.22 mである。上～中層にかけては褐色シルト、黄橙色のシルトがレンズ状に堆積する。ここからの遺物は、遺構の大きさの割りに少なく土師器片が１片出土しただけである。

他に、**遺構 570**（ピット状遺構）や**遺構 631**（土坑状遺構）からも古式土師器の細片が数片出土したに留まる。

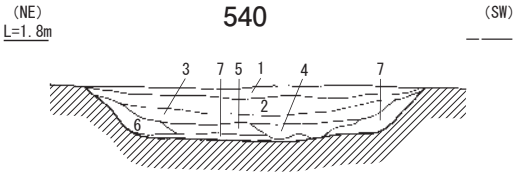
調査地ほぼ中央の南側で掘立柱建物４棟を検出した。発掘当初は、建物１を構成する柱穴から古式土師器に混じって黒色土器の細片が１片出土し、古代に帰属する建物群と考えたが、遺物整理時に確認まちがえと判明した。従って、これらの帰属する時期は古墳時代と考えられる。全ての建物は割合に遺りが良好で、中でも掘立柱建物２・３の柱穴は残存状態が良好であった。また、この４棟は主軸方位の違いから時期差が考えられる。掘立柱建物２・３は軸線が同じであるため同時期と考えられるが、掘立柱建物１、掘立柱建物４は先の２棟と軸線を異にするため、これら４棟間で２時期あるいは３時期あるものと思われる。掘立柱建物１～４を構成する柱穴からは、細片ではあるが割合に多い数が出土している。なお、実測に耐えうる遺物は皆無であった。

掘立柱建物１（第４・８図、図版４） 南北棟の建物である。南側は調査区外に延び、その全容は不明である。主軸は 12° 東偏する。規模は桁行３間以上（間尺：北から 1.20m、1.60m、1.64m）、梁行２間（間尺：東から 1.82m、1.88m）の総柱建物である。掘方の平面形状は隅丸方形で、一辺約 0.6 ～ 0.75 m、残存の深さは約 0.3 ～ 0.5 mを測る。埋土は黄灰色系のシルトである。この建物を構成する柱穴からの遺物の総数は 215 片出土し、この内、古式土師器 214 片、須恵器甕片１であった。柱穴（576）と柱穴（581）の遺物が接合できた。

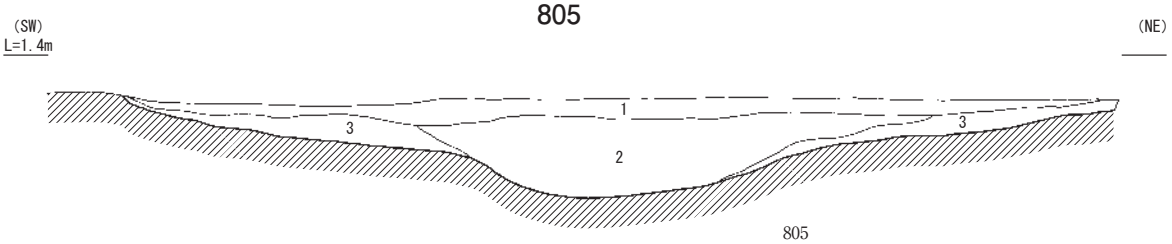
掘立柱建物２（第４・８図、図版４） 南北棟の建物である。主軸は 47° 東偏する。規模は桁行２間（間尺:東から 1.64m、1.70m）、梁行２間（間尺:北から 1.42m、1.38m）の総柱建物である。掘方の平面形状は隅丸方形で、規模は一辺 0.5 ～ 0.55 mを測る。残存の深さは 0.5 ～ 0.65 mを測る。埋土は暗黄灰色系のシルトである。建物を構成する柱穴からの出土遺物の総数は 43 片出土し、すべて古式土師器である。柱穴（339）からは出土総数の５割量が出土した。

掘立柱建物３（第４・８図、図版４） この建物も東西棟である。主軸は 47° 東偏する。規模は桁行３間（間尺：東から 1.64m、1.66m、1.60m）、梁行２間（間尺：北から 1.95m、2.06m）の側柱建物である。掘方の平面形状は隅丸方形で、規模は一辺 0.45 ～ 0.55 mを測る。残存の深さは 0.5 ～ 0.7 mを測る。桁行方向の北列は建替えが認められ。柱穴の埋土は黄灰色系ないし暗オリーブ色のシルトである。この建物を構成する柱穴からの総出土破片数は 127 片で、すべて古式土師器であった。

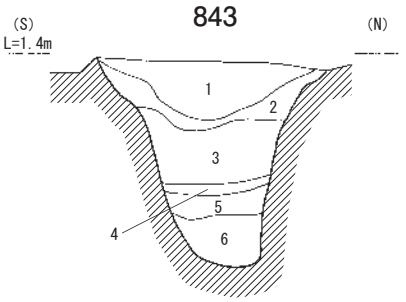
掘立柱建物４（第４・８図） 東西棟の桁行２間（間尺:東から 1.74m、1.64m）、梁行１間（間尺:1.64m）の建物である。主軸はほぼ北で、僅かに３° 東偏する。堀方の規模は一辺 0.4 ～ 0.55 mの

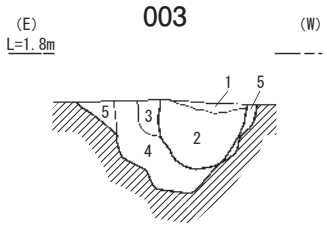


540
1．10YR4/4(褐色)シルト　φ0.2 ～ 0.8cm の片岩礫その他細礫を少量含む
2．2.5Y3/3(暗オリーブ褐色)シルト　φ0.2 ～ 1.0cm の片岩礫を少量含む
3．2.5Y4/4(オリーブ褐色)シルト　φ0.2 ～ 0.5cm の片岩礫を少量含む
4．10YR5/2(灰黄褐色)シルト　φ0.2 ～ 0.5cm の細礫を微量含む
5．2.5Y5/2(暗灰黄色)シルト　φ0.2 ～ 0.5cm の細礫を微量含む
6．2.5Y6/1(黄灰色)シルト
7．10YR5/4(にぶい黄褐色)シルト
8．2.5Y6/6(明黄褐色)シルト



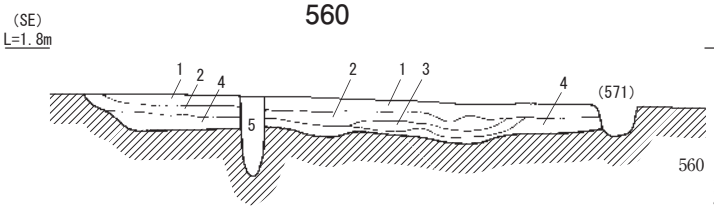
805
1．2.5Y5/3(黄褐色)シルト
2．10YR3/3(暗褐色)シルト　炭化物を少量含む
3．10YR4/2(灰黄褐色)シルト





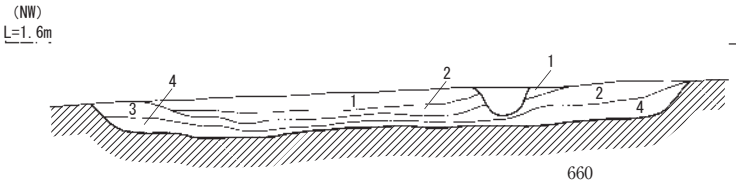
843
1．10YR5/3(にぶい黄褐色)シルト
φ0.5 ～ 1cm の礫を微量に含む
2．2.5Y4/6(オリーブ褐色)シルト
粗砂を少量、φ0.5 ～ 0.8cm の礫を微量含む
3．2.5Y4/1(黄灰色)シルト
4．2.5Y4/6(オリーブ褐色)粗砂
第３層のシルトを少量含む
5．2.5Y3/1(黒褐色)シルト
φ0.2 ～ 0.8cm の礫を少量含む
6．10BG5/1(青灰色)シルト
10YR4/4(褐色)粗砂をブロック状に含む

003
1．5Y7/1(灰白色)シルト
2．2.5Y6/1(褐灰色)シルトにφ2.0 ～ 4.0cm の
10YR7.5/8(黄橙色)シルトがブロック状に混じる
3．10YR7.5/8(黄橙色)シルトと 10YR5.5/2
(灰黄橙色)シルトの混層
4．10YR5/1(褐灰色)シルト
5．10YR6/2(灰黄褐色)シルトと 10YR7.5/8(黄橙色)
シルトの混層

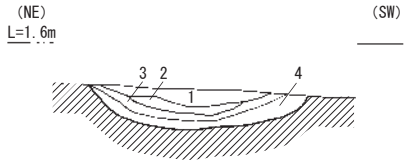


560
1．7.5YR4/3(褐色)シルトにφ0.2 ～ 3.0cm 大の片岩礫を少量含む
2．7.5YR4/4(褐色)シルトにφ0.2 ～ 3.0cm 大の片岩礫を少量含む
3．7.5YR4/5(褐色)シルトにφ0.2 ～ 3.0cm 大の片岩礫を少量含む
4．10YR8/8(黄橙色)シルトに 7.5YR5/4(にぶい褐色)シルトと
10YR7/1(灰白色)シルトがブロックに混じる
5．7.5YR3/2(黒褐色)シルト

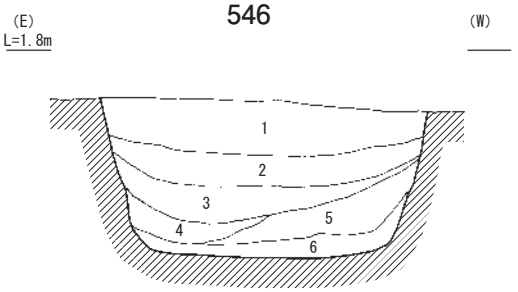
660 南北方向



660 東西方向

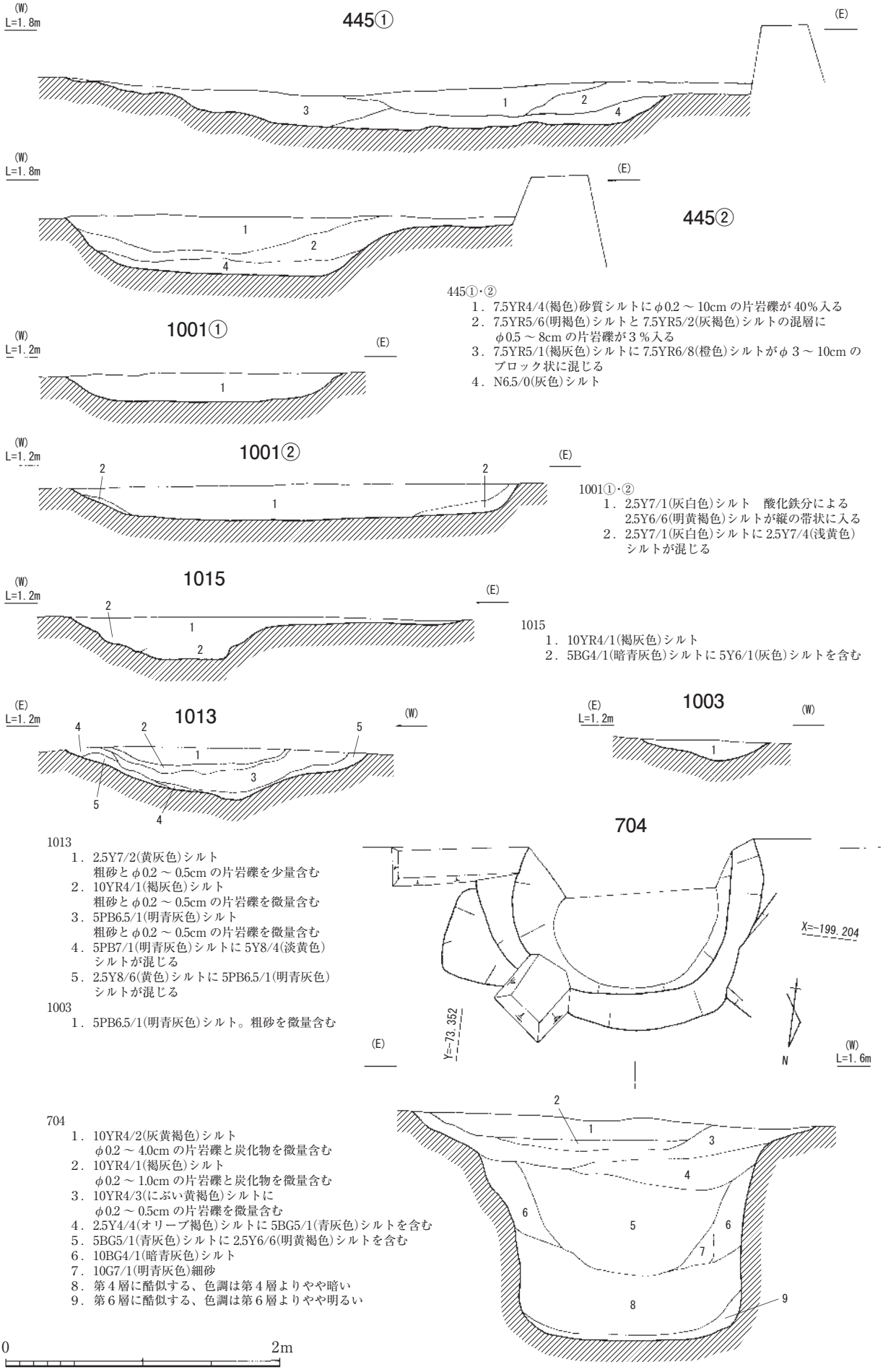


660
1．2.5Y5/2(暗灰黄色)シルト　10YR6/6 ～ 2.5Y6/6(明黄褐色)シルトを少量含む
粗砂を微量含む
2．2.5Y6/2(灰黄色)シルト　粗砂を微量含む
3．2.5Y6/6(明黄褐色)シルト　φ0.2 ～ 8cm の礫と粗砂を微量含む
4．10YR5/1(褐灰色)シルト



546
1．10YR4/4(褐色)粗砂混じりのシルト　φ5.0 ～ 10cm の片岩礫を微量含む
2．10YR4.5/3(褐色)シルト　φ 1 ～ 3cm の片岩礫を少量含む
3．10YR3/4(暗褐色)粗砂混じりのシルト　φ 1 ～ 3cm の礫を少量含む
4．2.5Y6/6(明黄褐色)シルト　5BG5/1(青灰色)シルトを少量含む
炭化物を微量含む、φ 5 ～ 10cm の礫を少量含む
5．10YR3/3(暗褐色)シルト　第３層と酷似するが色調が第３層に比べやや暗い
φ0.5 ～ 1.5cm の片岩礫を少量含む
6．5BG5/1(青灰色)シルト　φ0.1 ～ 0.3cm の片岩礫を微量含む

第６図　A 区遺構 003・540・546・560・660・805・843 土層実測図（S = 1/40）



445①・②
1．7.5YR4/4(褐色)砂質シルトにφ0.2 ～ 10cm の片岩礫が 40％入る
2．7.5YR5/6(明褐色)シルトと 7.5YR5/2(灰褐色)シルトの混層に φ0.5 ～ 8cm の片岩礫が 3 ％入る
3．7.5YR5/1(褐灰色)シルトに 7.5YR6/8(橙色)シルトがφ 3 ～ 10cm の ブロック状に混じる
4．N6.5/0(灰色)シルト

1001①・②
1．2.5Y7/1(灰白色)シルト　酸化鉄分による 2.5Y6/6(明黄褐色)シルトが縦の帯状に入る
2．2.5Y7/1(灰白色)シルトに 2.5Y7/4(浅黄色) シルトが混じる

1015
1．10YR4/1(褐灰色)シルト
2．5BG4/1(暗青灰色)シルトに 5Y6/1(灰色)シルトを含む

1013
1．2.5Y7/2(黄灰色)シルト
粗砂とφ0.2 ～ 0.5cm の片岩礫を少量含む
2．10YR4/1(褐灰色)シルト
粗砂とφ0.2 ～ 0.5cm の片岩礫を微量含む
3．5PB6.5/1(明青灰色)シルト
粗砂とφ0.2 ～ 0.5cm の片岩礫を微量含む
4．5PB7/1(明青灰色)シルトに 5Y8/4(淡黄色) シルトが混じる
5．2.5Y8/6(黄色)シルトに 5PB6.5/1(明青灰色) シルトが混じる

1003
1．5PB6.5/1(明青灰色)シルト。粗砂を微量含む

704
1．10YR4/2(灰黄褐色)シルト
φ0.2 ～ 4.0cm の片岩礫と炭化物を微量含む
2．10YR4/1(褐灰色)シルト
φ0.2 ～ 1.0cm の片岩礫と炭化物を微量含む
3．10YR4/3(にぶい黄褐色)シルトに
φ0.2 ～ 0.5cm の片岩礫を微量含む
4．2.5Y4/4(オリーブ褐色)シルトに 5BG5/1(青灰色)シルトを含む
5．5BG5/1(青灰色)シルトに 2.5Y6/6(明黄褐色)シルトを含む
6．10BG4/1(暗青灰色)シルト
7．10G7/1(明青灰色)細砂
8．第 4 層に酷似する、色調は第 4 層よりやや暗い
9．第 6 層に酷似する、色調は第 6 層よりやや明るい

第 7 図　A 区遺構 445・704・B 区遺構 1001・1003・1013・1015　土層実測図　(S ＝ 1/40)

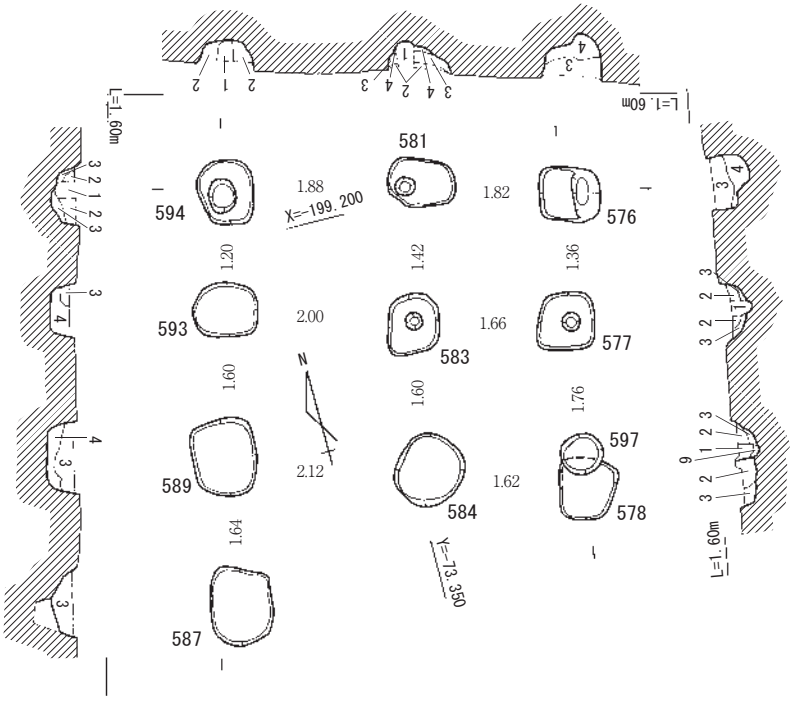
隅丸方形で、残存の深さは約 0.3 ～ 0.35 ｍを測る。埋土は灰色系のシルトである。この建物を構成する柱穴からの出土した遺物の総破片数は 40 片で、古式土師器 38、須恵器２片（杯１、甕１）であった。

次に中世に帰属すると考えられる遺構について記す。

遺構 003 （第４・６・17 図、巻頭カラー２、図版３） 調査地の北東の地山上で検出した。この遺構の最上層からは琴柱形石製品が出土した。形状はほぼ円形を呈し、直径約 0.5 ｍを測る。残存の深さは約 0.35 ｍを測る。埋土は２層に分層でき、上層は灰白シルトが５㎝程度の厚みでレンズ状に堆積する。下層は褐灰色シルトに黄橙シルトの２～４㎝大のものがブロック状に入る。埋土の状況から中世の土坑と思われる。他の出土遺物には土師器破片が出土している。

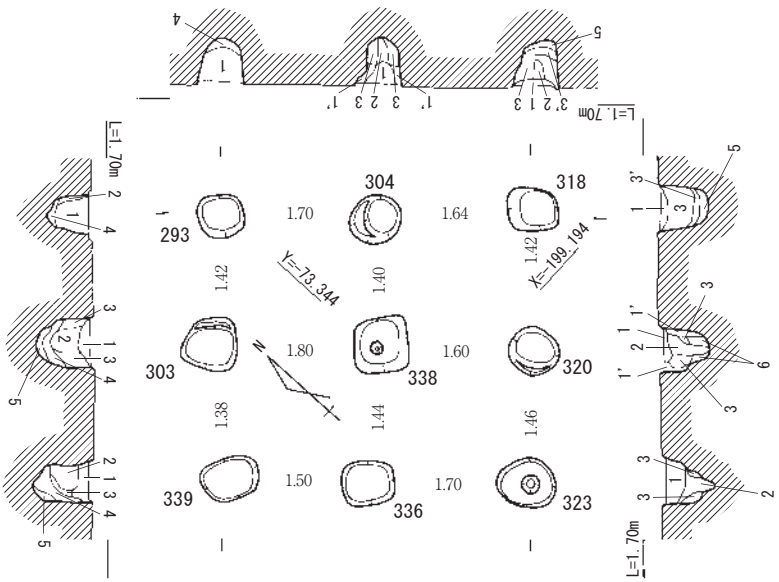
溝状遺構 445 （第４・７図）調査区中央で、南北方向の溝を検出した。この溝は調査地に隣接する竈山墓の北側を東流する水路に直交する。幅約 3.5m ～ 6.5m を測り、北側で広がる。残存の深さは北側の最も深い箇所で 0.35 ｍ測り、南側では約 0.40 ｍを測る。北側では西肩部分が緩やかな３段となる。埋土は３層に分層できる。上層は 7.5YR4/4（褐）細砂混じりのシルトに 0.2 ～ 10㎝大の片岩礫が多量に入るという、いかにも人為的に埋められた状況を呈す。中層は 7.5YR（明褐）シルトに 7.5YR5/2（灰褐）シルトが混ざる。下層は N6.5/0（灰）シルトである。この溝状遺構からの出土遺物には、どの層からも古墳時代の須恵器や土師器に混じり中世遺物が出土しているため、帰属時期は出土遺物から鎌倉後期と考えられる。なお、北側と南側の溝底のレベルから判断して北流していたと考えられる。この溝からは(45 ～ 54)の遺物が出土した。(45 ～ 51）は土師器皿である。(45・47 ～ 51）は口径 11 ～ 12㎝を測り、指押え後、軽いナデで仕上げている。色調は灰白色である。(46)は調整が同じであるが､口径が他のものに比べ若干大きく、色調も橙色である。(52）は白磁皿である。高台タタミ付きおよび外面は露胎となる。内外面ともに細かい貫入が見られる。(53）は須恵器壷の口縁部である。(54）は東播系こね鉢である。口縁端部は肥厚する。形状から魚住 22 号窯と同時期と考えられる。また、**遺構 554** や**遺構 124** のピットからも（42・43）の土師器小皿が出土している。口径は約７㎝で、体部は斜め上方に真っ直ぐ立ち上がる。底部未調整である。

土坑 546 （第４・６図） 遺構 445 の西側で検出した。規模は南北方向約 2.1m、東西方向約 1.8m を測る。壁はほぼ垂直に掘られ、底は平らである。残存の深さは約 0.85m を測る。埋土は６層に分層できレンズ状の堆積を示すが、検出面から約 0.75m までは、意図的に埋められたと考えられ、褐色系のシルトに５～ 10㎝の大振りの礫を多量に含む。底は自然堆積と考えられる青灰色シルトが堆積する。出土遺物は上層からは古墳時代の遺物に混じり瓦器片、最下層からは東播系捏ね鉢（41）が出土している。(41）の外底部には回転糸切り痕が見うけられ、外面横ナデ、内面は丁寧なナデを施している。内底面は使用痕で摩滅している。遺構 445 と同時期と考えられる。



掘立柱建物１

１．2.5Y4/1(黄灰色)シルトに 10YR6/8(明黄褐色)シルトを不定形な斑状に含む、粗砂及びφ0.2 ～ 1.5cm の礫をわずかに含む
２．2.5Y5/1(黄灰色)シルトに 10YR6/8(明黄褐色)シルトと 2.5Y4/3(黄灰色)シルトをわずかに含む
３．2.5Y4/2(暗黄灰色)シルトに 10YR6/8(明黄褐色)シルトと 2.5Y6/1 (黄灰色)シルトをφ1.0cm の斑状に含むφ0.2 ～ 3.0cm の片岩礫をわずかに含む
４．2.5Y5/6(黄褐色)シルト　φ0.2 ～ 0.4cm の礫を少量含む
５．2.5Y4/3(オリーブ褐色)シルトに 10YR6/8(明黄褐色)シルトがブロック状に含む　φ0.2 ～ 0.4cm の礫を少量含む
６．2.5Y6/4(にぶい黄色)シルトに 10YR6/8(明黄褐色)シルト・2.5Y6/1(黄灰色)シルト・2.5Y4/1(黄灰色)シルトが混ざるφ0.2 ～ 0.4cm の礫を少量含む
７．2.5Y4/1(黄灰色)シルトに φ 4 ～ 5cm の 2.5Y6/1(黄灰色)シルトをブロック状に含む
粗砂及びφ1.0 ～ 6.0cm の片岩礫を若干含む
８．2.5Y4/3(オリーブ褐色)シルトに粗砂をわずかに含む
９．2.5Y5/1(黄灰色)シルトにφ2.0 ～ 3.0cm2.5Y6/1(黄灰色)シルトをブロック状に含む

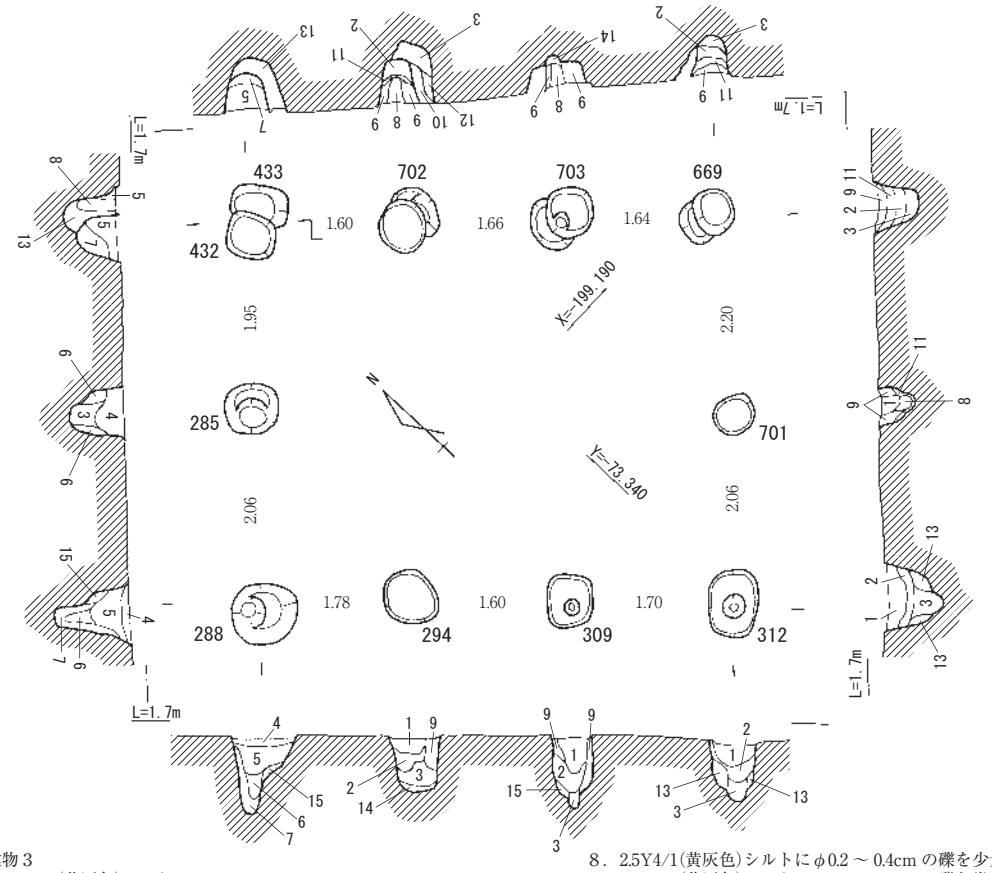


掘立柱建物２

１．2.5Y4/3(暗オリーブ色)シルトに 2.5Y6/1 黄灰色シルトをわずかに含み、粗砂及びφ0.2 ～ 0.5cm の礫を少量含む
1'．2.5Y6/3(にぶい黄橙色)シルトに 2.5Y3/1(黒褐色)シルトを斑状に含む
２．2.5Y4/1(黄灰色)シルトにφ1.0 ～ 4.0cm の 2.5Y6/1(黄灰色)シルトをブロック状に含む
３．2.5Y4/1(黄灰色)シルト、第２層に酷似する　第２層より黄色味が強い　φ0.2 ～ 5.0cm の片岩礫わずかに含む
3'．10YR4/2(暗黄灰色)シルトにφ5.0cm 未満の 10YR6/8(明黄褐色)シルトを斑状に含む
４．2.5Y4/2(暗黄灰色)シルトにφ0.2 ～ 5.0cm の片岩礫を中量含む
５．10YR5/6(黄褐色)シルトにφ5.0 ～ 8.0cm 片岩礫を少量含む
６．2.5Y5/2(暗灰黄色)シルトに 2.5Y6/1(黄灰色)シルトを少量含む

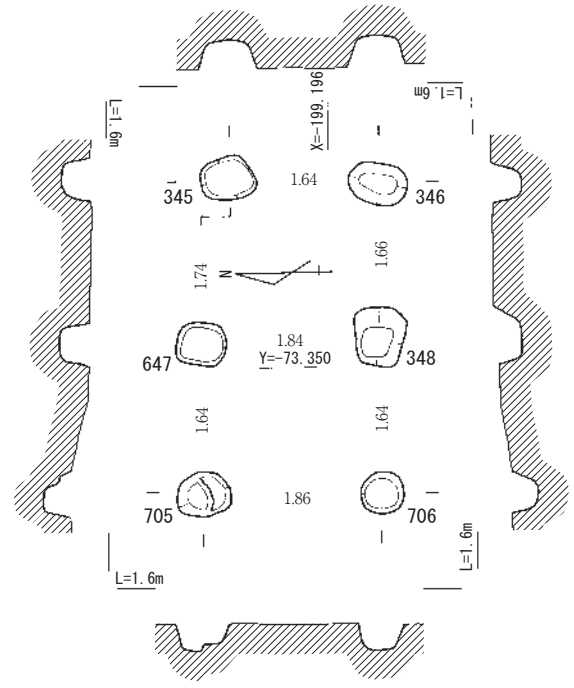
0　4m

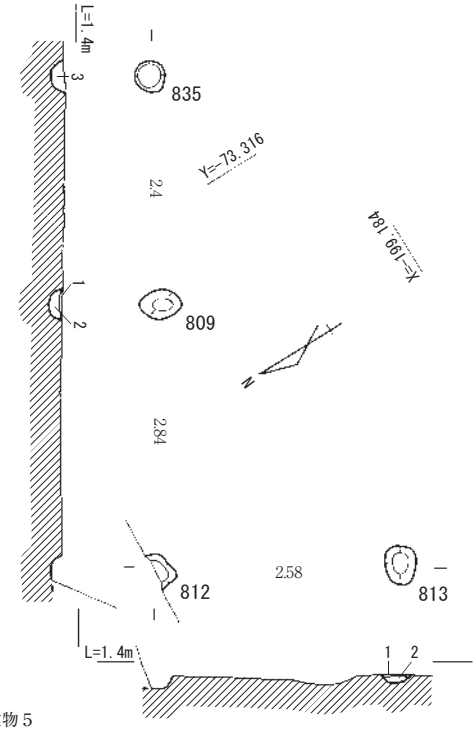
第８図　堀立柱建物１・２　実測図（S = 1/80）



掘立柱建物３

1．2.5Y5/1(黄灰色)シルト
2．5Y3/1(オリーブ黒色)シルトに 10YR6/8(明黄褐色)シルトと φ0.2 ～ 0.8cm 礫を少量含む
3．10YR3/2(黒褐色)シルト　第２層に酷似する φ0.2 ～ 0.8cm の礫を第２層より多く含む 明度もやや第２層より明るい
4．2.5Y4/3(暗オリーブ色)シルトに粗砂及びφ0.2 ～ 0.4cm の礫を少量含む
5．2.5Y4/1(黄灰色)シルトにφ0.2 ～ 0.8cm の礫を少量含む
6．10YR3/1(暗褐色)シルトに粗砂を少量含む
7．2.5Y4/2(暗黄灰色)シルトに粗砂を少量含む
8．2.5Y4/1(黄灰色)シルトにφ0.2 ～ 0.4cm の礫を少量含む
9．2.5Y5/1(黄灰色)シルトにφ0.2 ～ 0.4cm の礫と炭化物を微量に含む　第１層に酷似する、第１層より灰色味が弱い
10. 2.5Y5/1(黄灰色)シルト　第９層と酷似する 第９層より褐色味が強くφ0.2 ～ 0.8cm の礫の量が多い
11. 2.5Y5/1(黄灰色)シルト
12. 2.5Y5/1(黄灰色)シルト　第 11 層に酷似する 第 11 層よりやや褐色味を強く暗い
13. 10YR3/2(黒褐色)シルト　第３層と酷似し第３層より明るい
14. 10YR3/2(黒褐色)シルトと 10YR7/8(黄橙色)シルトの混層
15. 2.5Y5/2(暗灰黄色)シルト





掘立柱建物５

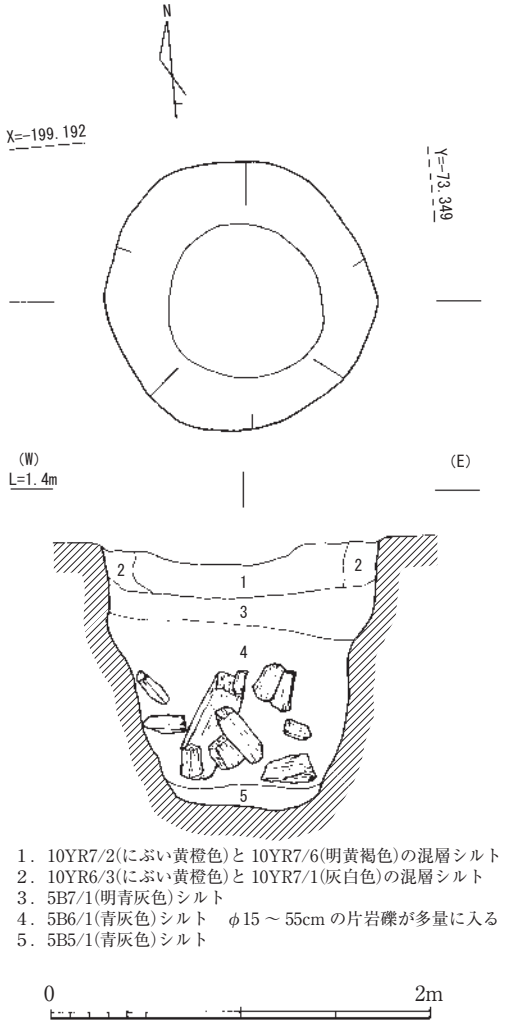
1．2.5Y5/2(暗灰黄色)シルトに 2.5Y5/6(黄褐色)シルトとマンガン粒を少量含む
2．2.5Y6/2(灰黄色)シルトに 2.5Y5/6(黄褐色)シルトを少量含む
3．10BG5/1(暗青灰色)シルトに 10YR3/4(暗褐色)シルトを少量含む

0　4m

第９図　堀立柱建物３・４・５実測図　（S ＝ 1/80）

遺構 250 （第４・10 図、図版５） 近現代の土坑状遺構掘削後検出した素掘り井戸である。形状は円形を呈し、規模は直径約 1.5m を測る。壁はやや斜めに掘られ、底も直径約 0.8m の円形を呈する。残存の深さは約 1.4m を測る。埋土は４層に分層できたが、基本的には２層である。検出面から約 0.25 ｍは黄橙色系シルト、それより下層は青灰色系シルトである。この青灰色シルト層は３層に分層でき、上部の２層には 15 ～ 60㎝大の片岩礫が多量に投棄されていた。従って、自然堆積層は底のシルト層だけと考えられ、上部よりも粘性が強い。出土遺物は黄橙色シルトから瓦器椀２片、須恵器甕１片、青灰色シルト層の上部からは瓦器碗３片、土師器皿１片、土師質土鍋１片が出土したに留まる。落込んでいた片岩礫はかなり大きいことや、殆ど底に近いことから、この遺構の上部周囲に構築されていた可能性が高い。（44）は口径 12 ～ 13㎝のやや小振りな瓦器椀で、キツイ指押さえによる稜が顕著にでる。高台は断面三角形で低い。外面のミガキは稜の凸部に密集する。

遺構 447 （第４図） Ａ区北側のコンクリート擁壁の際で検出した東西方向の溝である。西側では遺構 445 に切られ、おそらく調査区の北側に延びるものと考えられる。幅は 0.4 ～ 0.5 ｍで、残存の深さは約 0.2 ～ 0.3 ｍを測る。埋土は灰褐色系の砂質シルトの単一層である。ここからの出土遺物には(55 ～ 61)がある。(55)の須恵器杯身のように中世遺構に古墳時代の遺物が多量に入る。(56 ～ 60）は土師器皿で、いずれも体部は斜め方向に緩やかに立ち上がり、器面全体を丁寧なナデで仕上げている。色調は橙色を呈する。(56 ～ 59）は口径 11㎝を測り、底部を円盤状の粘土で貼付けている。(60）は復元口径約 15㎝を測り、丁寧なナデで仕上げる。(61）は青磁碗の底部である。



1．10YR7/2(にぶい黄橙色)と 10YR7/6(明黄褐色)の混層シルト
2．10YR6/3(にぶい黄橙色)と 10YR7/1(灰白色)の混層シルト
3．5B7/1(明青灰色)シルト
4．5B6/1(青灰色)シルト　φ15 ～ 55cm の片岩礫が多量に入る
5．5B5/1(青灰色)シルト

第 10 図　遺構 250　実測図　(S = 1/40)

遺構 448 （第４図） 調査区中程で検出した落込みである。深さは約 0.1 ～ 0.15 ｍで、北西方向の遺構 445 上に至る。この落込みは中世の時期に整地したと考えられる。整地土から出土した遺物には(62 ～ 66)がある。(62･63）は土師器皿である。双方ともに口径約 11㎝を測る。(64）は弥生時代後期前半の壷の口縁部で、口縁端部には竹管文が巡る。ローリ

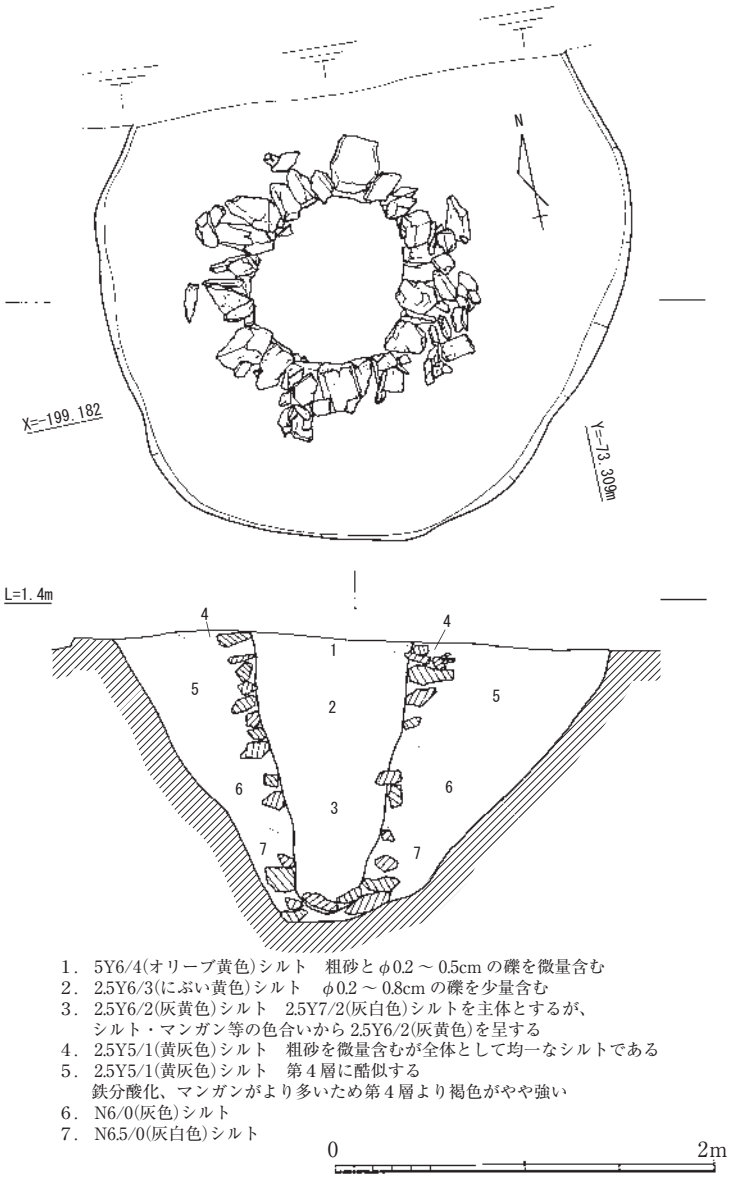
ングが激しい。(65) は土師質鍋の口縁部から体部である。口縁端部は内側に折り曲げる。内面は横刷毛を施す。外面には煤が付着し、頸部直下は粘土紐接合のための指押さえが顕著である。(66) は砂岩の敲き石である。

【A区北側】

検出した遺構は古墳時代の流路、井戸状遺構、中世の掘立柱建物、溝状遺構、土坑状遺構、石積み井戸などを検出した。

遺構 843 （第４・６図、図版３） 西端で検出した土坑状遺構である。形状は楕円形を呈し、長径約 1.80m、短径約 1.35m を測る。残存の深さは約 1.10m を測り、底の高さは標高－ 0.3m を測る。埋土は６層に分層でき、上層の１層～４層までは弱粘性、５・６層は粘性が強い。最下層には木葉が出土した。この遺構は、平面および断面の形状や湧水があることから、井戸の可能性が十分考えられる。(38・39) はⅡの１段階の須恵器杯身である。(38) は受部に沈線が認められる。(40) は長胴甕の底部と考えられる。他に、ここからの出土遺物には、須恵器杯片や甕片、土師器片など合わせて約 90 片出土した。

遺構 805 （第４・６図） 古墳時代の流路と考えられる。中世の溝状遺構 (802) や石積み井戸 (803) と重複して検出した。調査区の東側を南東方向から北西方向に延びる。井戸との重複もあるためトレンチを入れて深さを確認した。南側の肩部は確認できたが、北側については土層の断面形状からわずかに調査区外に至ると考えられる。従って、幅は 5.30m 強と推測できる。残存の深さは最も深い箇所で約 0.5 ｍを測る。埋土は基本的に２層に分層でき、上層は 2.5Y5/3（黄褐）シルト、下層は



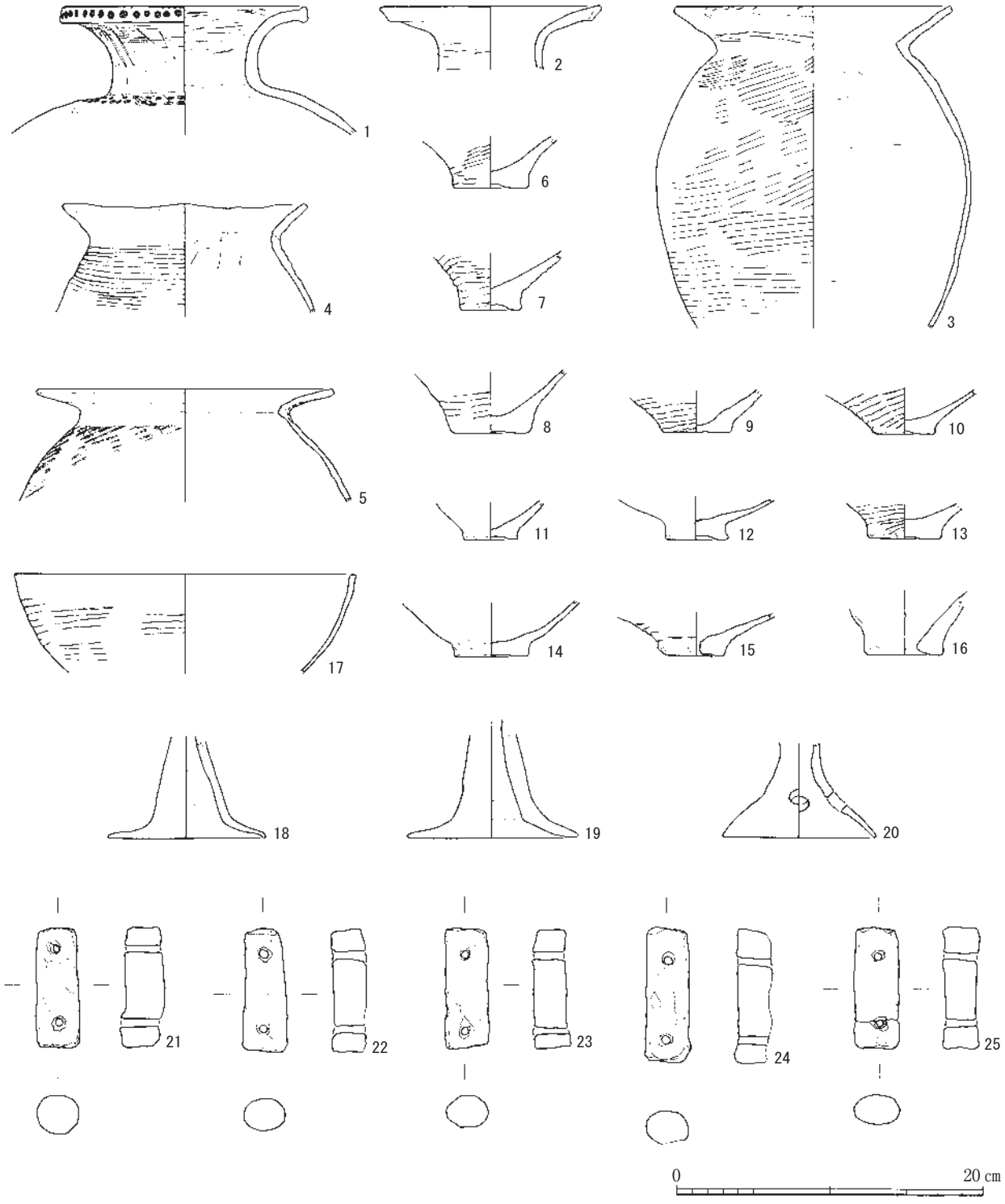
1．5Y6/4(オリーブ黄色)シルト　粗砂とφ0.2 ～ 0.5cm の礫を微量含む
2．2.5Y6/3(にぶい黄色)シルト　φ0.2 ～ 0.8cm の礫を少量含む
3．2.5Y6/2(灰黄色)シルト　2.5Y7/2(灰白色)シルトを主体とするが、
　シルト・マンガン等の色合いから 2.5Y6/2(灰黄色)を呈する
4．2.5Y5/1(黄灰色)シルト　粗砂を微量含むが全体として均一なシルトである
5．2.5Y5/1(黄灰色)シルト　第４層に酷似する
　鉄分酸化、マンガンがより多いため第４層より褐色がやや強い
6．N6/0(灰色)シルト
7．N6.5/0(灰白色)シルト

0　2m

第 11 図　遺構 803　実測図　(S ＝ 1/40)

10YR3/3（暗褐）シルトが堆積する。ここからの出土遺物には須恵器杯・壷・甕の破片、土師器高坏片などが出土している。

建物５（第４・９図）規模は南北１間（間尺 2.58m）以上、東西２間（間尺：東から 2.4m、2.84m）である。主軸は 25° 東偏する。柱穴は直径約 0.3 mの円形で、残存の深さは 0.15 ～ 0.2 m を測る。この建物を構成する柱穴 809 と柱穴 813 から古式土師器の細片４片が出土した。



第 12 図　A 区出土遺物実測図　　遺構 010：1 ～ 25

遺構 803　（第４・11 図、図版５）遺構 805 上で検出した。掘方の形状は円形を呈し、直径約 2.8m を測る。石材は 20 ～ 30㎝大の片岩礫を使用している。石積の内径は 80 ～ 90㎝を測り、やや楕円を呈す。石材が軟弱なため検出面から 40㎝弱を人力で掘下げ、あとは埋戻し時に重機で断割って深さを確認した。本体の埋土は黄色系で、上層から 5Y6/4（オリーブ黄）シルト、2.5Y5/1（黄灰）シルトである。掘方の埋土は灰黄色系シルトである。断割った結果、石積みの断面形は砲弾形を呈し、底で丸くなっていた。検出面からの深さは約 1.6m を測り、底での標高は－ 0.4m である。遺物は掘方から古墳時代の須恵器、土師器などが数点出土し、井戸本体の上層から瓦器片が出土した。

遺構 802　調査区東端で検出した溝である。調査区の北側から南側までの約 5.0 ｍを検出した。従って、南北伴に調査区外に延びる。幅は 0.4 ～ 0.7m を測り、残存の深さは６～８㎝と非常に浅い。埋土は 10YR7/1（灰白）微砂混じりシルトの単一層であった。

遺構 816・遺構 817・遺構 819 は遺存状態の良好でない溝状遺構である。遺構８02 も含め、これらの溝からは須恵器、土師器の細片が十数片出土したが中世遺物と判断できるものはなかった。

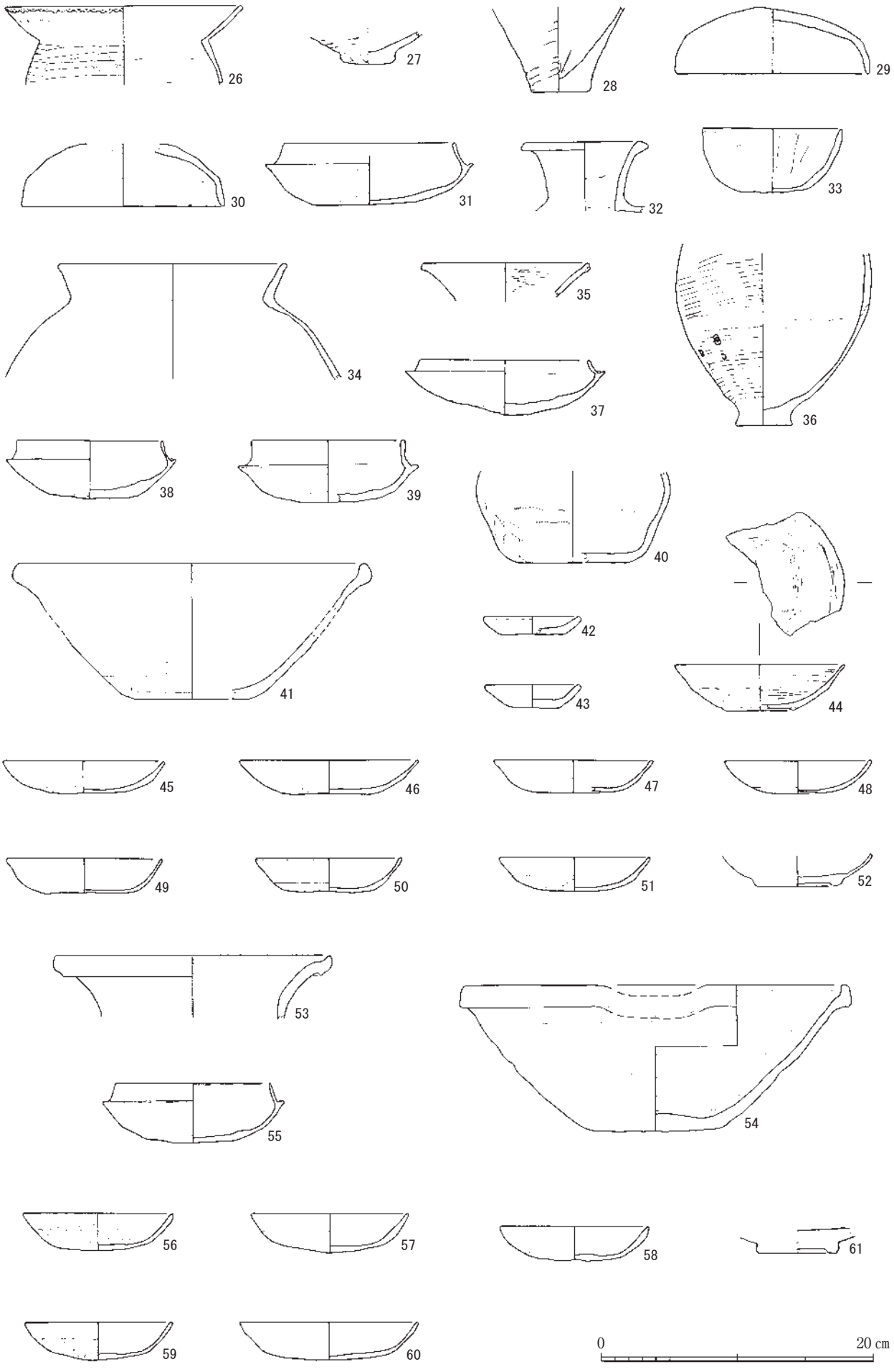
【Ｂ区】

この調査区での検出した遺構は古墳時代の土坑１基と中世の溝状遺構がある。出土遺物は、中世の溝から古墳時代の遺物が多量に出土した。

遺構 1007　Ａ区からＢ区に落込む南端の段上で検出した土坑状遺構である。規模は 1.4 ｍ× 1.1 ｍを測る。残存の深さは 0.1 ～ 0.15 ｍを測る。埋土は２層に分層でき、上層は 5YR5/2（灰褐）シルト、下層は 5YR6/1（灰褐）シルトである。（67）は須恵器の壷で、（68）はミニチュア土器で、体部は指頭痕が顕著である。底部外面は平らに撫でる。（69）の外面は縦方向の刷毛目調整を施す。小型の甕か。（70）は高坏の脚部で、有稜の大型高坏と思われる。

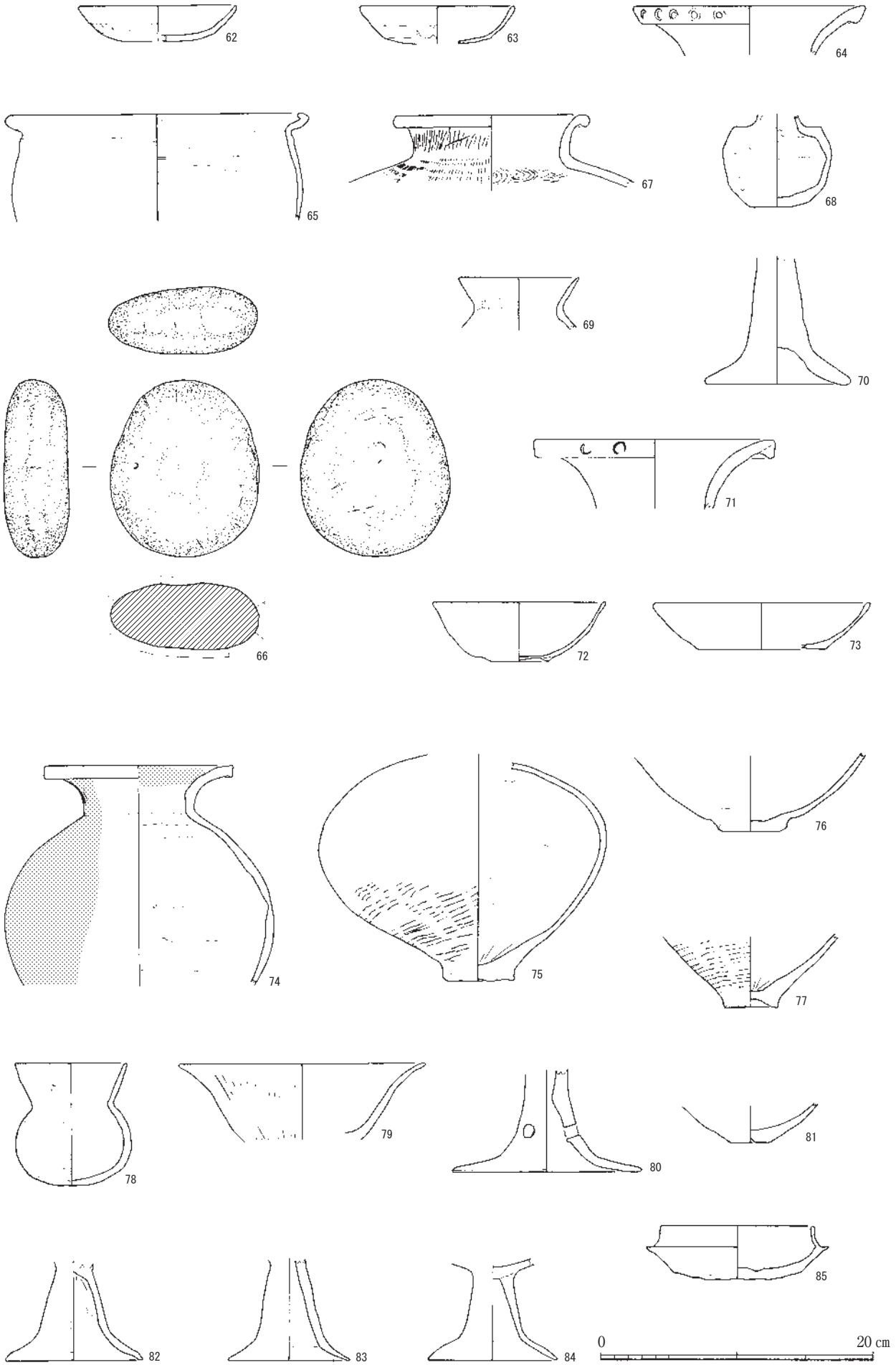
遺構 1003　（第４・７図）調査区東端で検出した南北方向に延びる溝状遺構である。検出長は約 26m を測り、調査地外に延びる。幅は 1.0 ～ 1.3m を測り、残存の深さは約 0.15 ｍを測る。埋土は単一層で５Ｐ B6.5/1（明青灰）である。出土遺物（72）の瓦器椀は摩滅が激しく、内外面の調整が不明である。（73）の土師器皿も器面が摩耗し、ミガキ、暗文が不明である。口縁径は約 15㎝を測る。底部の形状から糸切り底と思われる。他の出土遺物の破片には古墳時代の須恵器（杯・甕）、奈良時代の須恵器（長頸壺・杯蓋）、黒色土器などがある。

遺構 1001　（第４・７図、図版５）　調査区の中央付近で検出した。この遺構は溝状遺構と言うよりは流路である。調査区の北から南に掛けて検出した。南側では南西方向に蛇行しているような感がある。幅は最も広い箇所で約 7.0 を測り、狭い箇所では 2.2 ｍを測る。残存の深さは約 30㎝で、断面形は船底状を呈する。埋土は 2.5Y7/1（灰白）シルトの単一層である。この溝からは瓦器碗、東播系こね鉢、黒色土器、須恵器（杯・壷・甕）、土師器の破片が出土している。



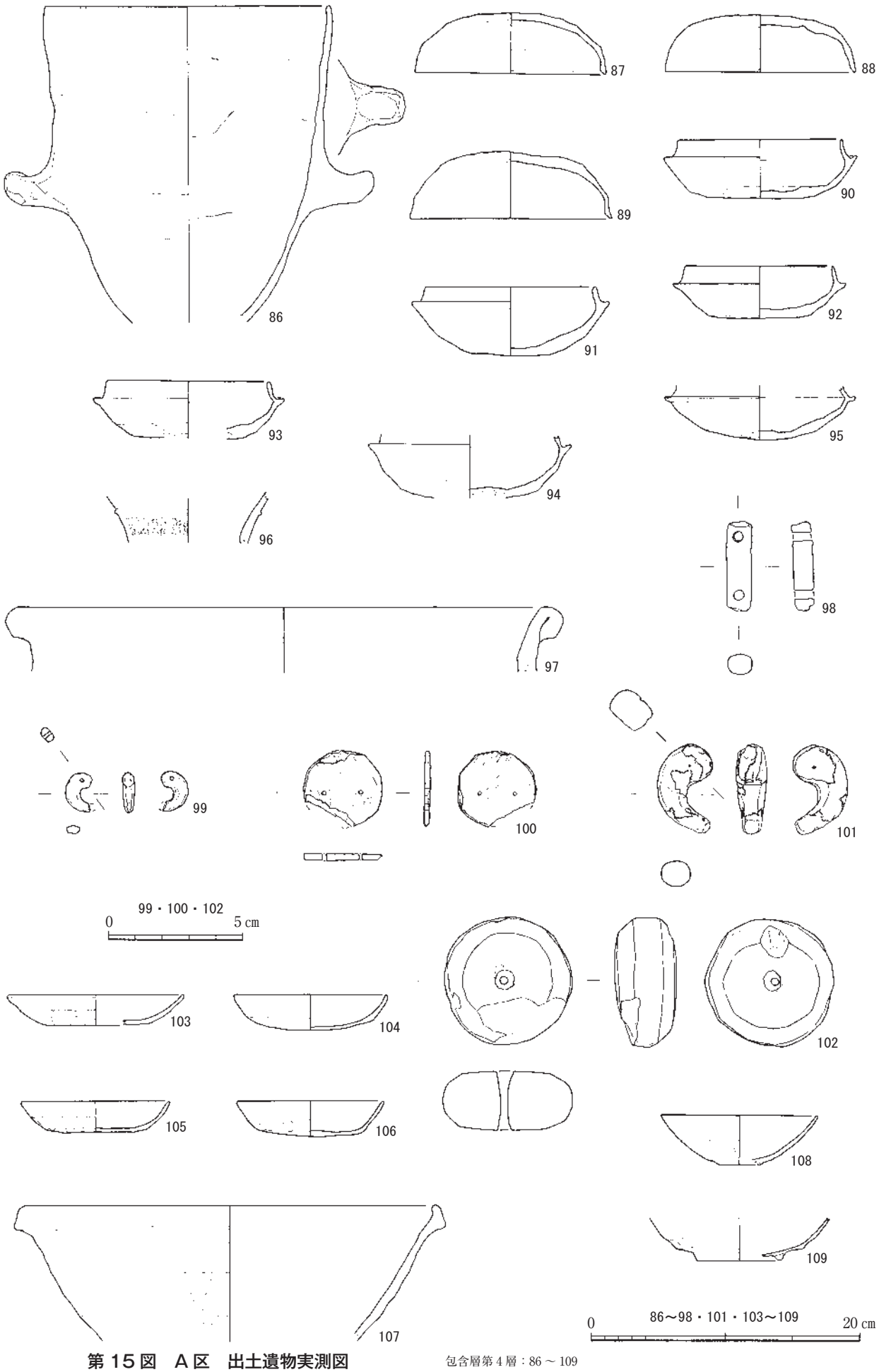
第 13 図　A 区出土遺物実測図

遺構 464：26～28、遺構 704：29～33、遺構 560：34、遺構 230：35・36
遺構 332：37、遺構 843：38～40、遺構 546：41、遺構 554：42、遺構 124：43
遺構 250：44、遺構 445：45～54、遺構 447：55～61



第 14 図　A・B 区出土遺物実測図

遺構 448：62～66　　遺構 1007：67～70　　遺構 1013：71
遺構 1003：72・73　　A 区包含層 3 層：74～77　　A 区包含層 4 層：78～85



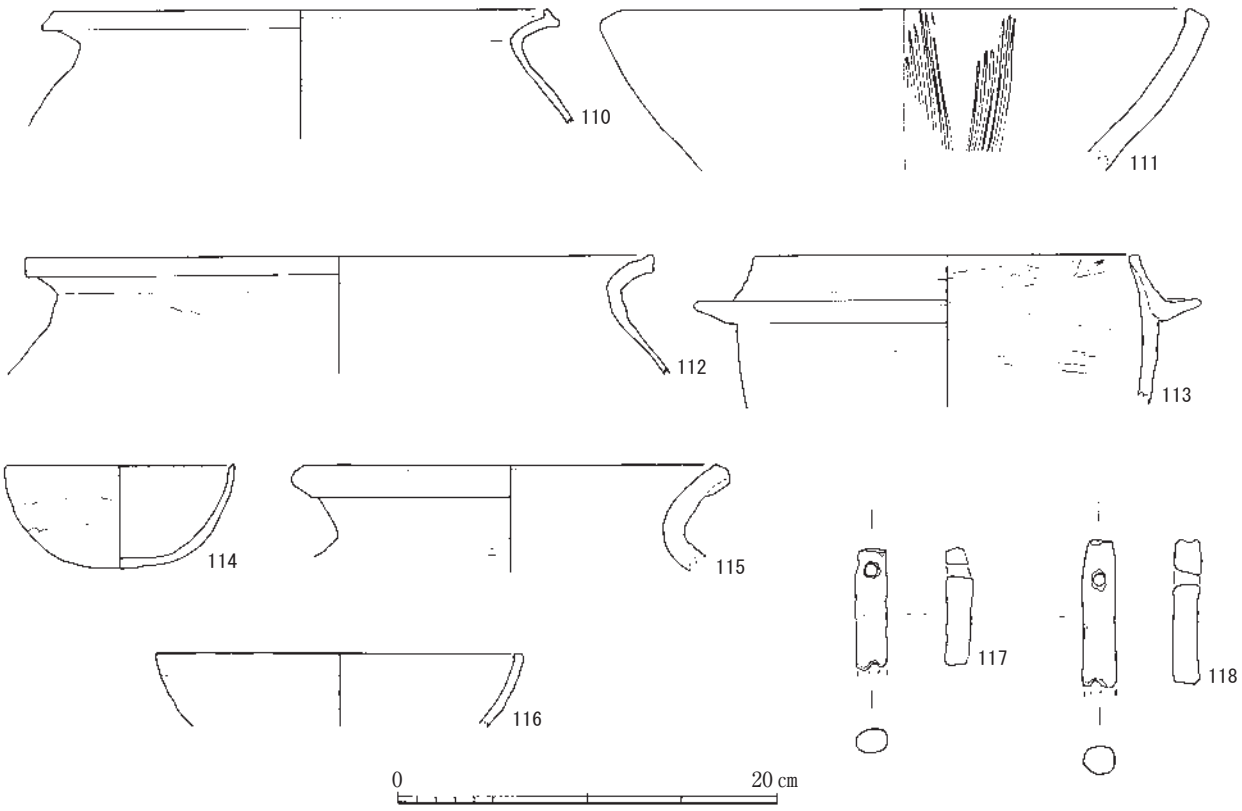
第 15 図　A 区　出土遺物実測図

包含層第 4 層：86 ～ 109

遺構 1013・1015（第４・７図、図版５）これらの２条の溝は調査区の北側で合流する。検出時に前後関係を確認したが、同様な埋土であるため同一のものとした。1013 の肩は２段落ちとなる。残存の深さは 1013 では約 0.35 m、1015 では約 0.3 mを測る。埋土は基本的に単層の 10YR3/1（黒褐）を呈する。この双方の溝も遺構 1001 と同方向に蛇行している。

この調査区で検出した溝群はその底のレベルから北方向に流れていたと考えられる。(71）は弥生時代中期後葉～後期前半の垂下口縁の広口壺と思われる。口縁に竹管文を施す。出土遺物はこの広口壺のみであった。

【Ａ区包含層の出土遺物】(74）は庄内併行期の広口壺で、頸部は短く体部は丸い造りである。(75）は弥生時代後期後半の細頸壷である。器面は摩耗して調整は不明確である。(76）は弥生時代後期後半の壷である。(77）は布留式古段階の甕である。(78）は小型丸底壺で、外面刷毛調整を施す。布留式中～後半である。(79）は有稜高坏である。(80・82 ～ 84）は高坏脚部で、いずれも器面の摩滅が著しい。(80）は庄内～布留の時期、(82）布留式２・３の時期である。(83）は布留式以降の時期。(84）は胎土精良で、裾部が内湾する。布留式１・２の時期である。(81）は鉢である。(85）はⅡの１・２段階の須恵器杯身である。(86）甑は器面が激しく摩滅する。外面は刷毛調整で、扁平気味の把手がつく。(87 ～ 89）は須恵器の杯蓋である。いずれもⅡの２段階の時期である。(90 ～ 95）は須恵器の杯身で、(90 ～ 93）はⅡの２段階、(94・95）はⅡの４



第 16 図　Ａ・Ｂ区　出土遺物実測図

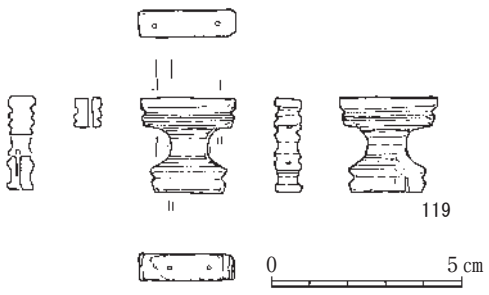
Ａ区包含層４層：110～113、
Ｂ区包含層３層：114～117、Ｂ区包含層４層：118

段階と思われる。(96) はⅠの４段階のハソウである。(97) は備前焼甕の口縁部である。14 世紀後半から 15 世紀初頭である。(98) は瀬戸内式の土錘である。(99) は勾玉で、石材は滑石である。(100) は有孔円板で、石材は緑泥片岩である。(101) は軟質岩の勾玉で、表面が白く風化し、穿孔も貫通していない。未製品と思われる。(102) は土製の紡錘車である。(103 ～ 106) は口径 11㎝内外を測り、(103・104・106) の色調は橙色、(105) は灰白色である。(107) の東播系こね鉢は、体部から口縁部にかけて緩やかに外反する。13 世紀初頭の時期である。(108) (109 共に器面の摩滅が激しい。(108) は瓦器椀、(109) は黒色土器椀Ａ類である。(110・112) は土師質鍋で、(110) は器面が摩滅している。(111) は乗岡編年の中世３期ａの備前焼擂鉢である。(113) は瓦質羽釜である。鍔部が二次焼成を受け赤色化する。(114) は土師器椀である。粘土紐接合痕が顕著に観察できる。(115) は須恵器の中型甕である。(116) は黒色土器椀Ａ類である。(117・118) は有孔土錘である。(119) は滑石製琴柱形石製品である。

【003 出土の琴柱形石製品について】過去、和歌山県下で出土した琴柱形石製品は、出土状況が不明確なものも入れると３例があり、本例も入れると４例目となる。３例の出土地はいずれも古墳からで城山古墳、八王子山古墳、丸山古墳である。次に過去の出土状況を簡単に記す。

①　南部町所在の城山古墳は、大正４年に真福寺の裏山の標高 20 ｍの小丘陵で赤土採掘中に偶然発見された。古墳の規模は封土の殆どを失っているが、残存部からの推定によると直径 10 ｍ、高さ２ｍの円墳であった。内部主体は硬質砂岩の組合式箱形石棺で両端に副室をもつ。出土遺物は仿製四獣鏡、銅鏃、鉄剣などがあり、この時いっしょに多くの玉類や琴柱形石製品も出土したということであるが、今はその所在が不明である。また、石棺の石材もいつしか持ち運ばれて消滅している。(註１)

②　和歌山市所在の八王子山８号墳は、和泉山脈南麓の標高 101.8 ｍの八王子山と標高 103.5 ｍの妙見山の稜線上に位置する。関西大学考古学研究室が昭和 51 年～昭和 54 年にかけて分布調査並びに発掘調査を実施した。この内の第Ⅳ次調査時の８号墳から出土した。墳丘の確認はできなかったが、東西に主軸をおく墓壙３基を確認している。この第３墓壙から鋸歯文鏡、鉄剣、刀子、玉類等と共に琴柱形石製品が出土している。(註２)



第 17 図　琴柱形石製品実測図　遺構 003　巻頭図版２

③　紀の川市所在の丸山古墳は貴志川左岸の上位段丘に位置する。直径 20 ～ 25 ｍ、高さ７ｍの円墳である。内部主体は組合式箱式石棺で長辺に副室をもつ。昭和８年の出土状況では、人骨、鉄鋌、鉄鉢、直刀、玉類、埴輪、琴柱形石製品などが報告されている。(註３)

第４章　まとめ

以上、調査区毎に主だった遺構について検出状況を記述してきた。今回の調査は大きく２地区に分かれ、この地形的な違いが遺構密度に反映した。

Ａ区は中世と考えられるピット状遺構が大半であったが、時期的には古墳時代、古代、中世の遺構と多種多様な遺構を検出した。Ｂ区においては溝状遺構群を検出しただけに留まった。この状況から微高地には集落が展開し、低地は湿地帯であったと考えられる。

〔古墳時代の状況〕　Ａ区の第３層、第４層とした片岩礫の入った層を中世の整地土と考えている。ここからはもちろんのこと中世の遺物が出土しているが、古墳時代の遺物が多量に出土している。目立って多いのが弥生時代後期、庄内併行期～布留式、５～６世紀の古墳時代の遺物である。このような出土状況から、この微高地に営まれた弥生時代後期～古墳時代の遺構が中世の時期に削平され、大きく土地改変がなされた可能性が高いものと考えられる。Ａ地区の包含層第５層から出土した勾玉や有孔円板、土坑 003 から出土した滑石製琴柱形石製品、Ａ区北側の第４層から出土した軟質岩製土製勾玉などからも十分証明できる。出土した、琴柱形石製品は古墳の存在を示唆するものであるが、周辺に多くの古墳が存在することと関連性があるのであろうか。何らかの事情で土坑状遺構から出土したのであろう。今回の調査では古墳時代の集落遺跡と決定づける竪穴住居を検出できなかったが、立派な掘方の掘立柱建物を４棟検出できた。これらの建物が、出土遺物から古墳時代に帰属するとは断言できないものの、何らかの施設が存在したと考えられる。先にも記した土坑状遺構（843）はその形状や規模、深さなどから井戸と考えられることから、この地に古墳時代の集落が展開されていた可能性は十分高いと言える。

〔古代の状況〕　古代の遺物は判別できるものは奈良時代の須恵器や平安時代の黒色土器が僅かしか出土しなかった。しかしながら、今後の周辺の調査において、この時期の遺構の存在に期待がもたれる。

〔中世の状況〕　調査地全体に渡り遺構、遺物を確認した。遺構はＡ区でピット状遺構を無数に検出した。これらは並びの方向性はあるが、建物を建てるに至らなかった。井戸はＡ区の西端とＡ区北側で検出した。このようなピット状遺構や井戸の検出状況から、微高地には中世集落が展開されていたことが確認された。その成立時期は、出土遺物から鎌倉時代後期～室町時代前期までと考えられる。

坂田遺跡は新規認定の遺跡で、今回の調査が初めてで、遺跡の解明には十分な成果を出すには至らなかったが、古墳時代、古代、中世の３時期に画期があったと判ったことが、今回の調査の成果であったと考えられる。調査地の北側には、まだまだ遺跡が展開するものと思われ、次に調査の機会があれば、各時期の集落の展開範囲が明瞭になることが期待される。

報告書抄録

ふりがな	さかたいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	坂田遺跡発掘調査報告書
副書名	県道三田三葛線道路改良工事に伴う発掘調査報告書
編著者名	佐伯　和也
編集機関	財団法人　　和歌山県文化財センター
所在地	〒640 － 8246　和歌山県和歌山市湊 571 － 1　TEL073-433-3843
発行年月日	西暦 2011 年 3 月 25 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
さかたいせき 坂田遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 さかた 坂田	3020150	435	34° 12′ 7″	135° 12′ 17″	2009 年 11 月 12 日 ～ 2010 年 3 月 12 日	1,947㎡	県道三田三葛線道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坂田遺跡	集落跡	弥生時代後期～古墳時代中世	溝・土坑 溝・土坑・井戸・掘立柱建物等	弥生土器、土師器、須恵器、琴柱形石製品、勾玉、有孔円板、紡錘車、黒色土器、瓦器、土師器皿、東播系こね鉢、備前擂鉢、青磁碗	古墳の存在を示唆する琴柱形石製品が出土した。県下で4例目である。

要約	調査地は微高地と低湿地に大別でき、微高地では弥生時代から古墳時代にかけての溝や土坑、中世の掘立柱、溝、土坑、井戸などの遺構が検出された。これに伴う遺物も出土したが、殆どの遺物は著しくローリングをうけ、小破片が多い。低湿地においては、中世の溝状遺構を数条検出しただけに留まった。ここから出土する遺物もまた、著しいローリングが認められ、いずれも小破片で実測に耐えうる遺物は少量であった。

(註 1) 南部町史通史編　第二巻　編集　南部町史　編さん委員会　発行　南部町　平成 9 年 9 月 11 日発行
熊野路考古　南紀考古同好会 1964 年
和歌山市橘谷遺跡　Ⅳ発掘調査概要　関西大学考古学研究室　1979 年 3 月発行
(註 2) 和歌山県史考古資料　編集　和歌山県史編さん委員会　発行　和歌山県　昭和 58 年 2 月 25 日発行
(註 3) 和歌山県史考古資料　編集　和歌山県史編さん委員会　発行　和歌山県　昭和 58 年 2 月 25 日発行
貴志川町史　第一巻　通史編　編集　貴志川町史編集委員会　発行　貴志川町　昭和 63 年 4 月 1 日発行

図版 1

1、調査地近景
（東上空から）

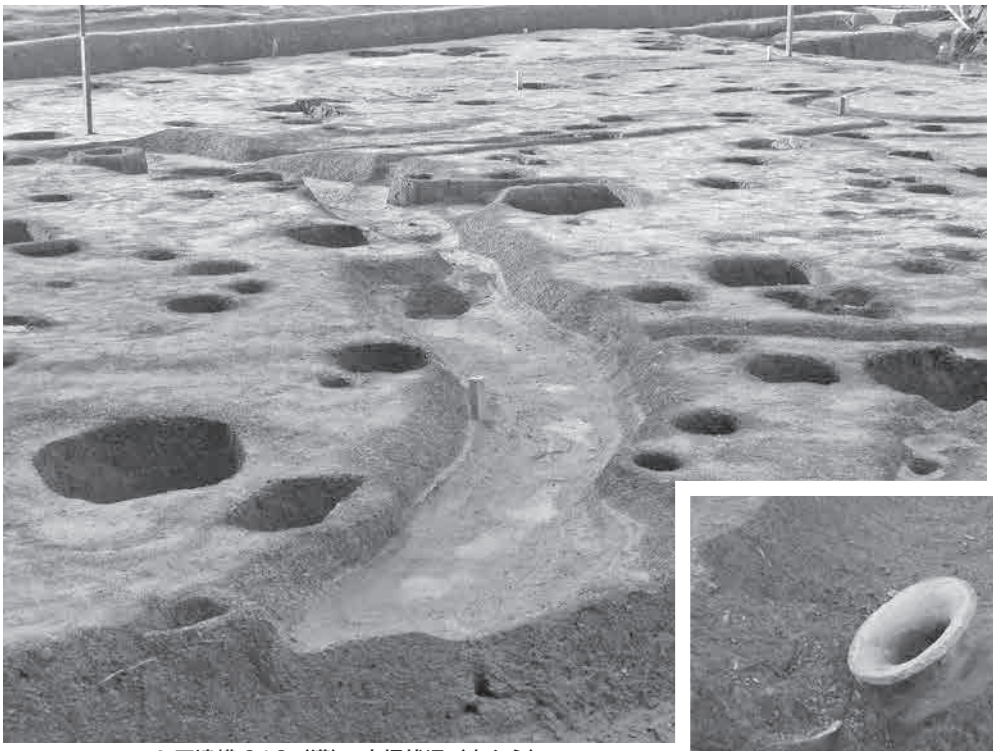
2、調査地近景
（西上空から）

図版 2

調査区全景
（東から）

A 区北側全景
（西から）

A 区東側全景
（東から）



A 区遺構 010（溝） 完掘状況（東から）

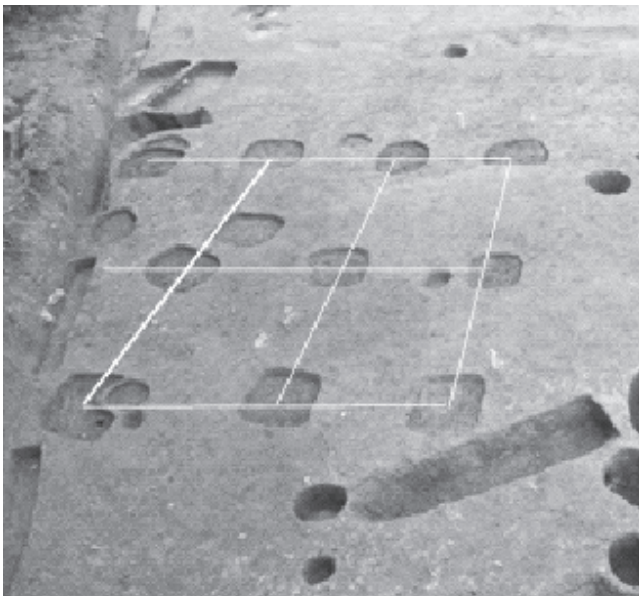
001 内 土器出土状況（西から）

A 区北側遺構 843（土坑）土層堆積状況（東から）

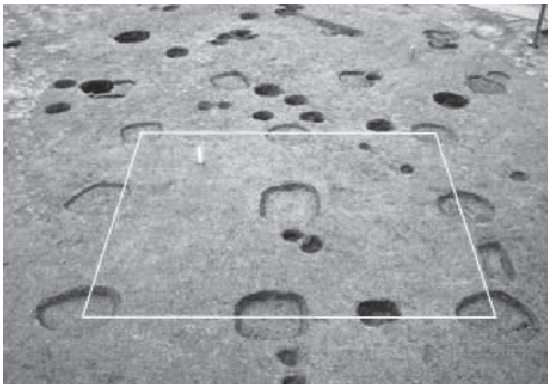
A 区遺構 003（土坑）（北から）

843 完掘状況（東から）

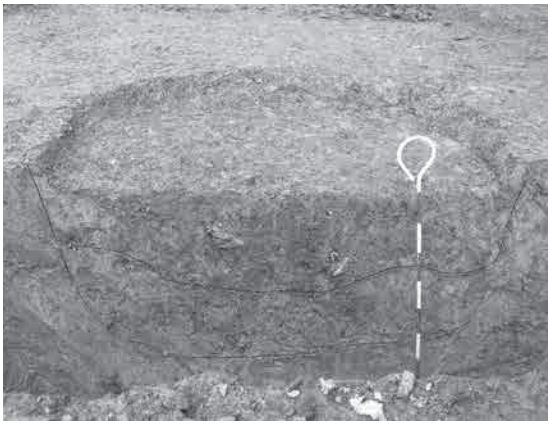
003 内 琴柱形石製品出土状況



A 区掘立柱建物 1（東から）



A 区掘立柱建物 2（南西から）

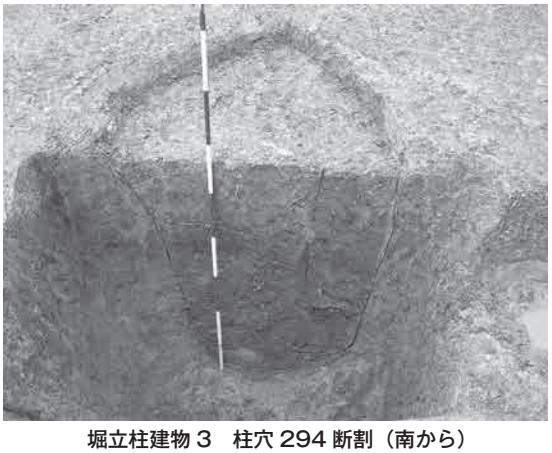


堀立柱建物 1　柱穴 589 断割（西から）

A 区堀立柱建物 3（南西から）

堀立柱建物 2　柱穴 304 断割（西から）

建物 5（東から）



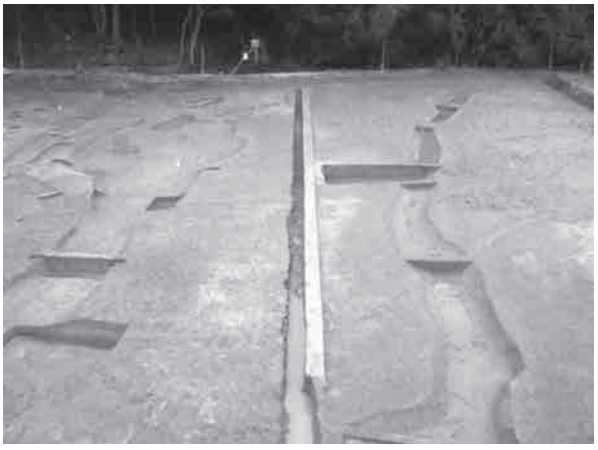
堀立柱建物 3　柱穴 294 断割（南から）

A 区遺構 250（井戸）検出状況（南から）

A 区遺構 803（井戸）検出状況（北から）

250　断割状況（南から）

803　断割状況（南西から）



B 区遺構 1001（溝状遺構）・1015（溝状遺構）完掘状況（北から）

B 区遺構 1013（溝状遺構）・1015（溝状遺構）完掘状況（北東から）

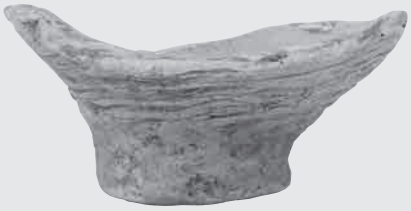
1

3

2

4

6


7

10

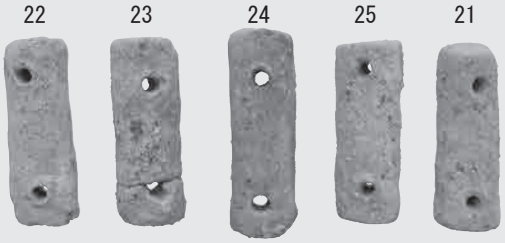
14

15

18

19

20



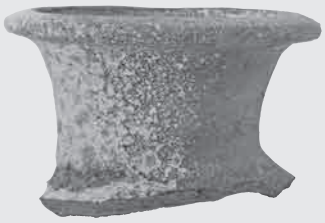
26

29

30

31

37


32

33

35

34

36

40

38

39

41

44

42

43

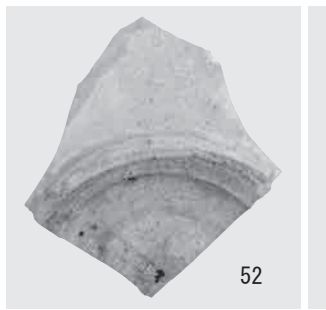
49

56

59

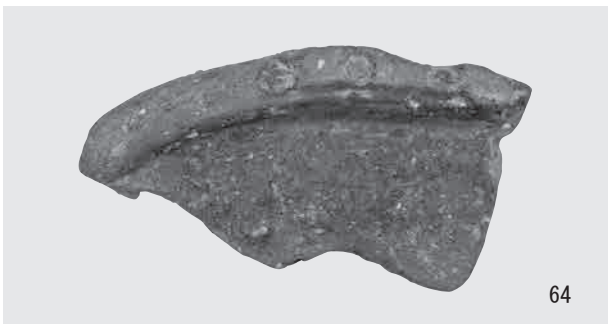
62

55


52

61

53


64

54

65

67

68

70

71

77

81

74

75

78

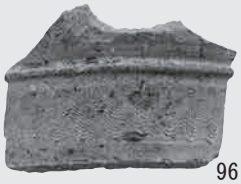
82

84

85

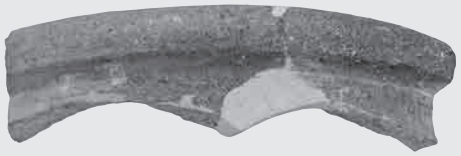
88

90

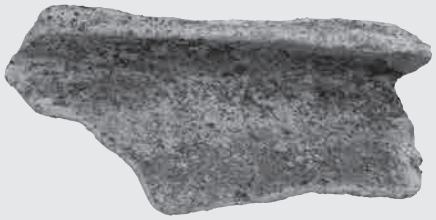

96

86

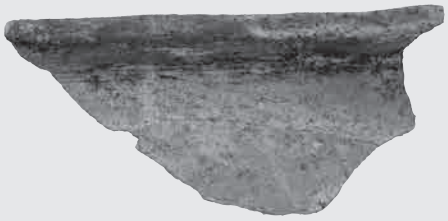
89


97

91

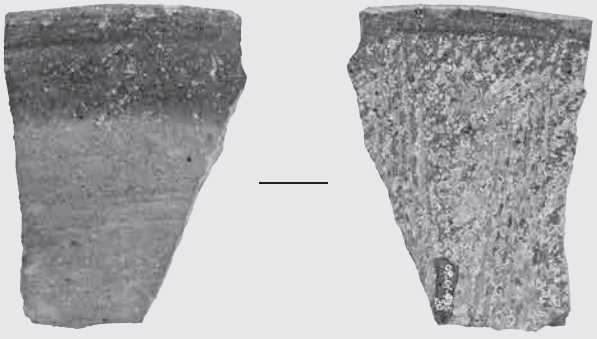

110

107


112

114

113


111

101

100

102

99

坂 田 遺 跡

―県道三田三葛線改良工事に伴う発掘調査報告書―

2011 年 3 月 25 日

編集・発行　財団法人　和歌山県文化財センター

印刷・製本　株式会社　協 和